

京都府埋蔵文化財情報

第 38 号

大田南 2 号墳の発掘調査	肥後 弘幸	1
京都府木津町瓦谷古墳の調査	伊賀 高弘	7
聖域区画小考	小池 寛	18
—平成 2 年度発掘調査略報—		31
5. 横 浦 古 墓	8. 八木嶋遺跡第 2 次	
6. 大田南・下後古墳群	9. 内里八丁遺跡	
7. 塚 本 古 墳		
資料紹介 長岡京跡左京第 216 次調査の古墳時代遺物の紹介(1)		
	中川 和哉	42
府下遺跡紹介 49. 蟹満寺		46
長岡京跡調査だより		49
京都府埋蔵文化財調査研究センター 10 周年記念特別展 「京都古代との出会い」について	平良 泰久	53
センターの動向		57
府下報告書等刊行状況一覧		59
受贈図書一覧		64

1990 年 12 月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版第1 大田南2号墳の発掘調査



(1) 大田南2号墳出土画文帯環状乳神獸鏡



(2) 大田南2号墳主体部検出状況



墳頂部埋葬施設(内部主体)全景 (南から)

大田南2号墳の発掘調査

肥後 弘幸

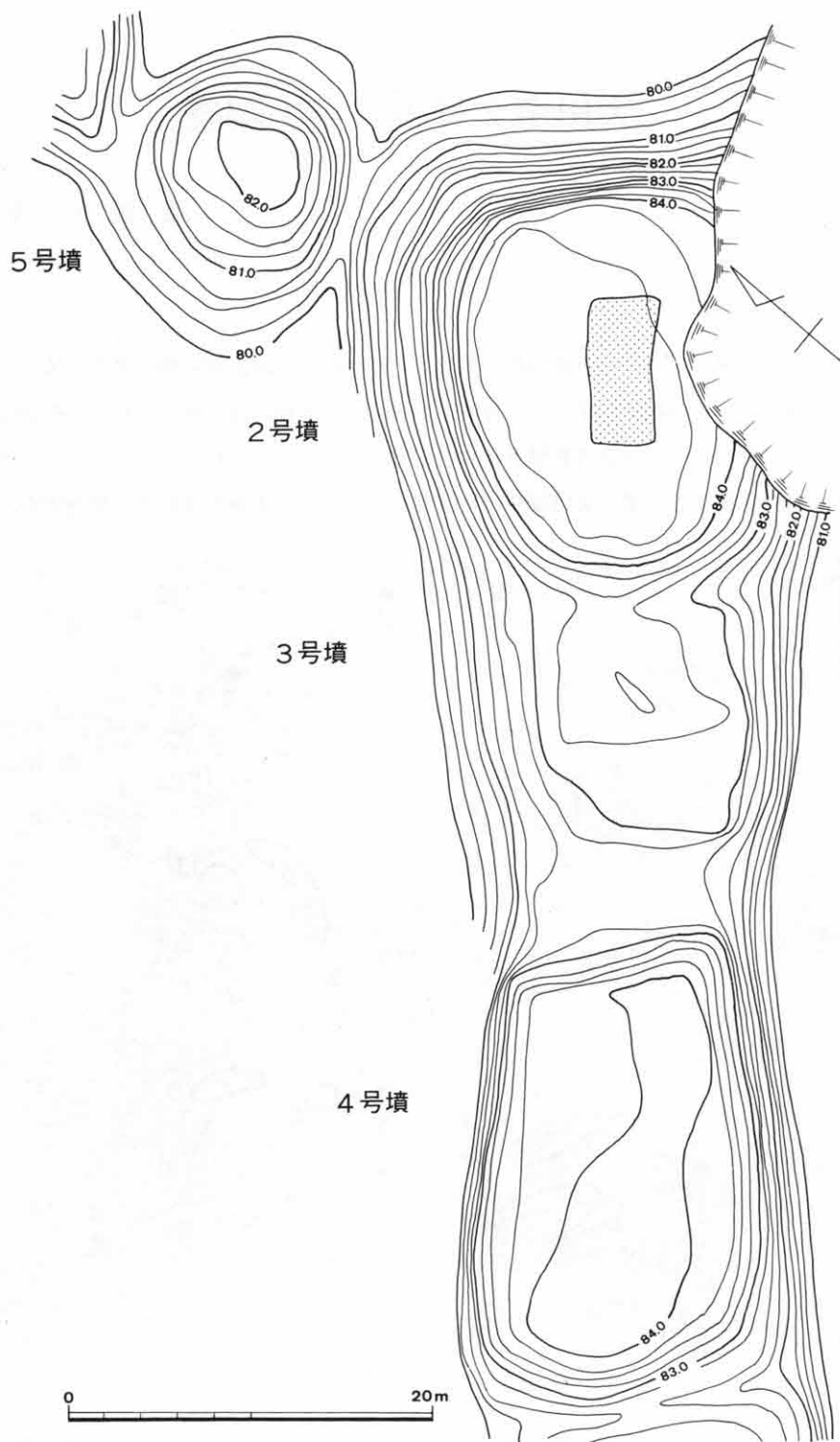
1. はじめに

大田南2号墳は、弥栄町と峰山町の町境標高84.6mの丘陵頂部に所在する古墳^(注1)である。今回の調査は、土砂採集作業により古墳が崩壊する危険性が高くなったため、弥栄町教育委員会が主体となって京都府教育委員会の指導のもとで緊急に行ったものである。今回の調査では、大田南3号墳・矢田城跡の発掘調査もあわせて実施している。現地調査は平成



第1図 調査地及び周辺の古墳時代主要遺跡

- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 大田南2号墳 | 2. オテジ谷古墳 | 3. 丸山古墳 | 4. 太田古墳群 | 5. スクモ塚古墳群 |
| 6. 名木山古墳群 | 7. 湧田山古墳群 | 8. 杉谷山古墳群 | 9. 西谷山古墳群 | 10. 八幡山古墳群 |
| 11. カジャ古墳 | 12. 奈具岡遺跡 | 13. 芋野遺跡 | 14. 荒山遺跡 | |



第2図 大田南2～5号墳地形測量図

2年2月20日に着手し、同3月30日にすべての調査を終了した。なお、現地が非常に危険なため、現地説明会のかわりに4月11日に同町中央公民館でスライド説明会を実施している。

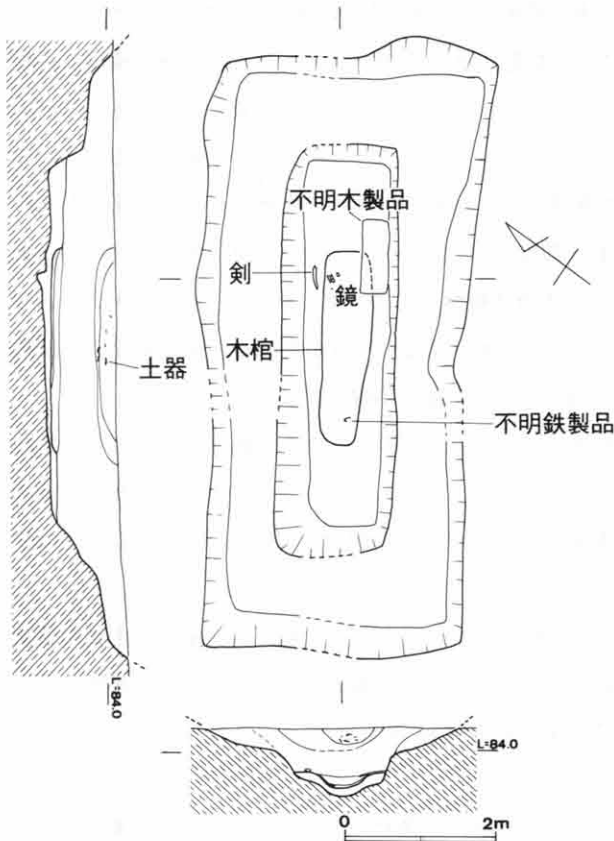
2. 大田南2号墳の概要

1)立地 大田南古墳群は、弥栄町字和田野から峰山町字矢田にかけての丘陵上に存在する古墳群で、3つの支群から構成される。^(注2)2号墳は、最も南の支群の中央部最高地点に位置する。古墳群のすぐ東を流れる竹野川の段丘面からの比高差は50m以上を測り、その眺望は非常にすぐれ、大宮町から峰山町にかけての中郡盆地及び弥栄町を一望できる。

2)墳丘 室町時代に築城された矢田城による改変が著しく、本来の形状は不明な点が多いが、現状から22m×18mの方墳と考えられる。地山を整形して営まれたもので、墓壇直上の棺の陥没による腐植土の堆積状況から盛り土はほとんど存在しなかったことが予想される。墳頂部平坦面の大きさは18m×14mである。

1号墳・3号墳・5号墳からの比高差は、それぞれ2m・1.5m・3mを測る。

3)埋葬施設 墳頂部中央部に木棺を埋葬施設とする墓壇1基が確認された。墓壇は、地山を2段に穿った2段墓壇で、検出面での平面規模は、長辺8.0m・短辺3.6mを測る。検出面が深かったこと及び上段の傾斜が極めて緩やかなことから復原される墓壇の規模は10m×4m以上である。下段は、長辺5.6m・短辺1.8mの規模を測り、地表下1.4mで墓壇底に至る。墓壇中央部に長さ2.3m・



第3図 大田南2号墳主体部実測図

幅0.6mの木棺痕跡が確認できた。木棺は、底の浅い舟形状(舟底状)を呈する。木棺は、地山直上に置かれたものではなく、地山上に10~20cmの床土を貼った後に据え置かれている。

副葬品は、棺内頭付近から銅鏡1面・同足元付近から不明鉄製品1点が出土している。棺外からは、鉄剣1振りと不明木製品1点が出土している。なお、鏡の周囲のみに朱が観察できた。ほかに墓壇埋土上層の腐植土(棺の陥没墳)から墓上での儀礼に伴うと思われる土器が出土している。

3. 出土遺物

出土した遺物は、鏡1面・鉄剣1振り・不明鉄製品1点・不明木製品1点及び土器片と非常に少ない。

1)銅鏡(図版第1) 鏡は、棺内の被葬者の頭部右側付近に鏡背を被葬者に向けて立てかけられてたものと思われ、棺陥没に伴う土圧によって破砕された状態で出土している。

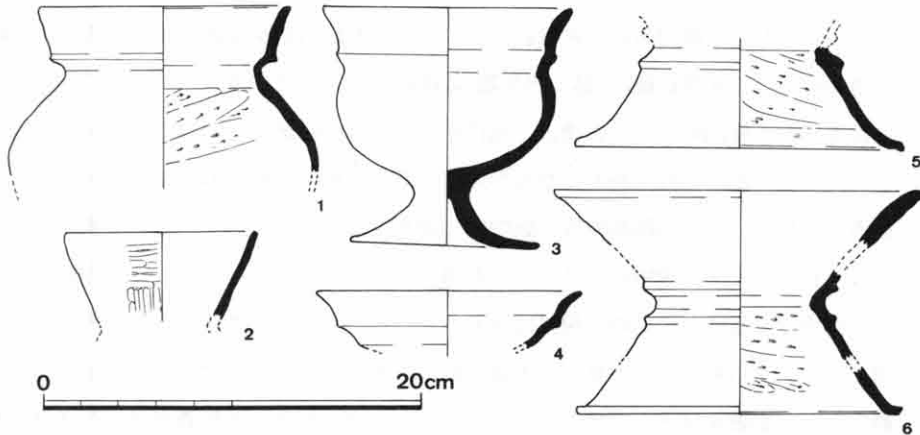
鏡は、面径14.8cmを測る舶載の画文帯環状乳三神三獸鏡(画文帯神獸鏡)である。鈕に2頭の龍が浮彫りされていること(浮彫盤龍文鈕)を特徴とする^(注3)。鏡背の文様構成は、浮彫盤龍文鈕—三神三獸+6個の環状乳—すべて4字からなる方格と4個の雷文をもつ半円からなる半円方格帯—櫛歯文帯—画文帯—平行2列からなる雷文を付す平縁となる。

2)鉄剣 鉄剣は、棺外被葬者の頭部付近、棺肩部からやや外側に切先を足元の方向に向けて置かれていた。茎部分に木質が観察できなかったことから柄部は装着されていなかったものと考えられる。また、全体に木質は観察できず、鞘のあった可能性も少ない。布等の付着物も遺存していなかった。全長32cm・茎部長4.6cmを測る。最大幅を、関部付近で測り、2.7cmである。切先から関部にかけて鑄が明瞭に観察できる。

3)不明鉄製品 棺内被葬者の足元付近から「U」字形を呈する鉄製品が出土している。細い板状の鉄製品を折り曲げたものである。布で包まれていたもので全面に良好な状態で布目が観察できる。鉋の可能性が指摘できるが先端部に鑿状の刃部が観察できない。全長約20cmを測る。

4)不明木製品 棺外頭部左側に一部棺内にかかるかたちで長方形を呈する木質を観察した。木質部分の厚さは1~2cmを測る。ほぼ同一平面上に存在し、木質の起伏は観察できない。検出できた平面形は、長さ約80cm・幅約30cmを測る長方形である。木製の盾の可能性が指摘できる。

5)土師器 表土直下に棺の腐朽に伴う陥没坑が観察でき、その上層から土師器片が出土している。1点を除くと他はすべて細片であることから、墓壇を埋め戻した直後に土器



第4図 出土土器実測図

を墓壙上で破砕したものと考えられる。出土した土器の個体数は、9点で、その内訳は、甕(1)1点・壺(2)1点・台付き鉢(3ほか)2点・高杯もしくは壺(4ほか)2点・鼓形器台(5・6ほか)3点である。甕(1)は、口径13.2cmを測る「5」字状口縁を呈する山陰の様相の強いものである。頸部屈曲部やや下方からヘラケズリを行う。台付き鉢(3)は、低い脚台に「5」字状口縁の鉢部をもつもので、外面はハケのちヘラミガキを行っていると思われる。鼓形器台は、口径が器高を凌駕するものの、稜はいまだ鋭いものである。

4. ま と め

今回調査を行った大田南2号墳からは、画文帯神獣鏡等を副葬する巨大な埋葬施設が検出された。この古墳の特徴をあげると以下のとおりになる。

- ①立地は、平地からの比高差50mを測る高所である。
- ②墳丘は、地山整形からなる方墳で明瞭な墳丘裾は確認できない。
- ③埋葬施設は、墳頂部中央に設けられた1基のみで、墓壙の大きさに比べて極めて短い舟底状を呈する木棺を採用する。
- ④副葬品には、棺内に画文帯神獣鏡・不明鉄製品、棺外に剣・不明木製品が認められるが玉類は存在しない。
- ⑤築造時期については、墳頂部から出土した土器群によって推定され、資料も少なくその編年の位置付けが現在のところやや困難であるが、山陰の様相の強い甕及び鼓形器台から古墳時代前期前葉から中頃に位置付けられる。

丹後地域における前期古墳は、加悦町蛭子山古墳・網野町銚子山古墳・丹後町神明山古墳の3つの巨大な前方後円墳に代表されるが、この内舟形石棺を埋葬主体とする加悦町蛭子山古墳が最も古く4世紀後半(第4四半期)に位置付けられている。一方、同じく4世紀後半に比定される峰山町カジャ古墳は、地山整形の直径70m余りの円墳であるが、中心主体は竪穴式石室に納められた長大な割竹形木棺であり、極めて畿内的な副葬品が伴っている。前者は墳形に、後者は埋葬施設に畿内的な要素を採り入れている。この2基の古墳に先行する4世紀前半から中頃にかけての首長墳の様相が長い間不明であった。今回調査を行った大田南2号墳は、その墳丘規模は比較にならないが蛭子山古墳・カジャ古墳以前の首長墳である。その特徴は、不整形な方墳・極めて短い舟底状の木棺・山陰的な土器様相及び畿内からの影響をほとんど受けていないことがあげられる。近年調査された宮津市波路古墳は、宮津湾に望む一辺20m規模の不整形な方墳と推定され、巨大な墓壇内に短い舟底状の木棺(報告では割竹形木棺)を納め、副葬品として棺内から玉類、棺外から藪・槍・壺等が出土している。立地・墳形・巨大な墓壇・短い舟底状の木棺など大田南2号墳との共通性が指摘できる。時期は、ほぼ同時期かやや先行する可能性がある。

以上のように今回の調査では、丹後地域の前期古墳を考える上で非常に重要な資料を得ることができた。今後、資料の増加を待って、弥生時代の墓制及び古墳時代前期の小規模古墳を含めて考えることによってより深い理解が得られることを期待する。

(ひご・ひろゆき＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

- 注1 大田南古墳群は、現地で行われている土砂採集作業中に発見された古墳群である。調査開始にあたっては、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの増田孝彦氏から御協力を得た。
- 注2 大田南古墳群の発見及び国営農地和田野団地開発に伴い従来の太田古墳群・中尾古墳群・水晶山古墳群・下後古墳群について現地踏査を行い再整理を行った。なお、太田古墳群については、旧来どおり『太田』を用いるが、大田南古墳群については、旧小字の『大田』の表記を用いる。なお、文化庁長官あてには大田南古墳群として通知している。増田孝彦ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成元年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990
- 注3 鈕に浮彫りの認められる鏡は、現在国内には2面確認されるのみである。静岡県松林山古墳出土の三角縁二神二獸鏡と出土地不明の五島美術館蔵の環状乳神獸鏡のみである。
- 注4 現在史跡整備のため行われている調査により蛭子山古墳の築造時期について新しい資料が揃いつつある。
- 注5 両丹考古学研究会の例会での中嶋陽太郎氏の発表資料による。

京都府木津町瓦谷古墳の調査

伊 賀 高 弘

1. はじめに

瓦谷古墳は、京都府の南端で平城山丘陵を挟んで奈良盆地に隣接する相楽郡木津町市坂に所在する古墳である。この地区では、関西文化学術研究都市の開発対象地として、住宅・都市整備公団の依頼を受けて、昭和59年度から継続的に埋蔵文化財の調査を実施しており、平成2年度はその一環として瓦谷古墳の調査を行った。その結果、古墳の内部施設の全貌が明らかになるとともに、多数の副葬品が出土するなどの注目すべき成果が得られた。

ここでは埋葬施設をはじめとする検出遺構の概要を中心に紹介することとし、現在整理中の遺物については副葬品の種類と点数を示すにとどめたい。

2. 調査概要

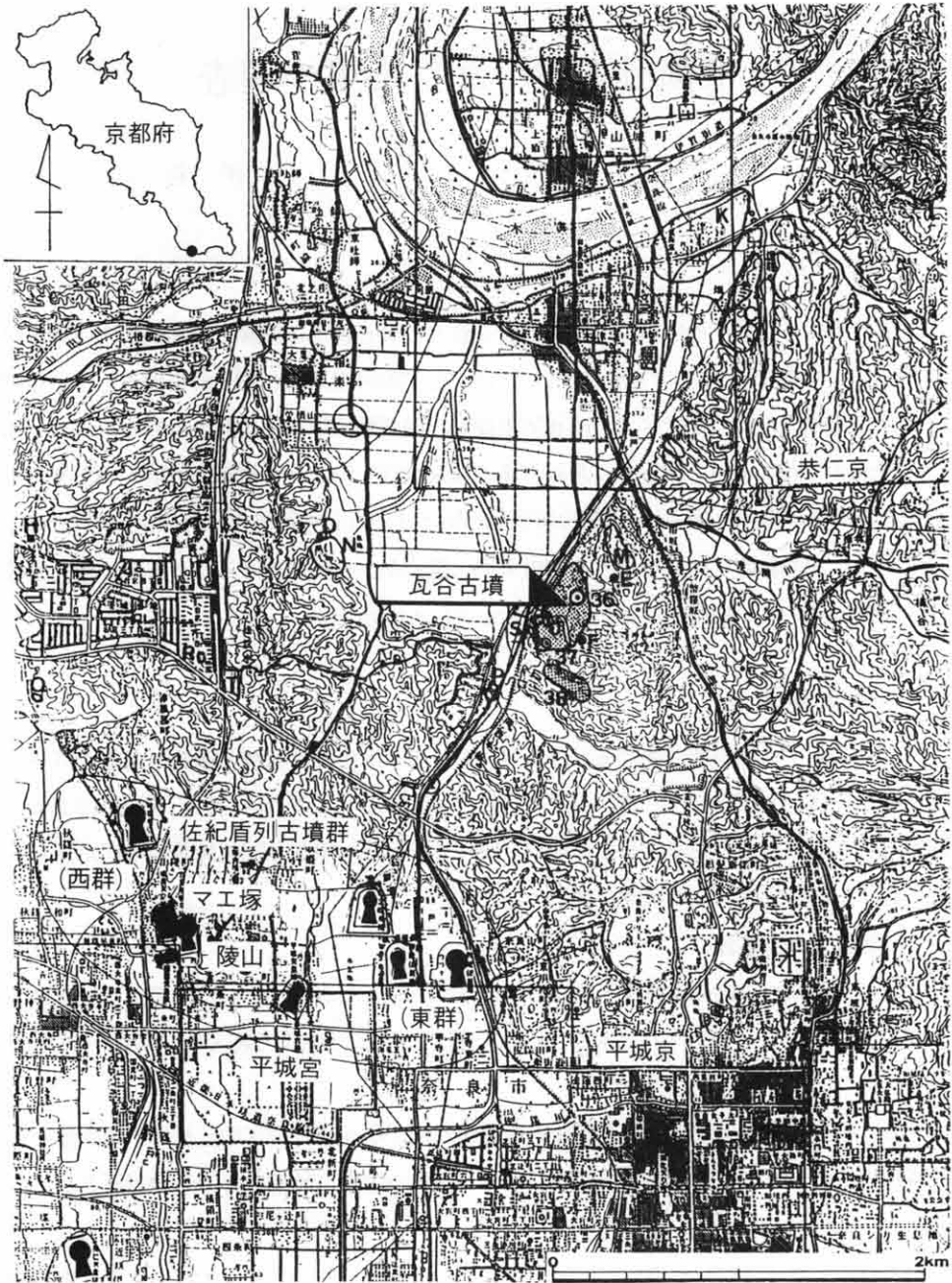
今回の調査は、墳頂部の埋葬施設の内容、及び墳丘北半部の状況の確認に主眼を置いて実施した。墳丘の調査では、特に古墳の規模を確定するべく調査区を広く周辺水田部まで拡げ、墳丘規模を明らかにするとともに、墳丘外郭施設・墳丘外部施設等の解明にあたった。以下、調査で判明した事実を簡単に紹介する。

(1) 墳丘と外部施設

古墳は、尾根の先端に連続する段丘の突端部に立地している。このため墳丘の大半は基盤層の整形によって築造されており、上位の盛土の厚さは現状で最大1.0mを測るにすぎない。

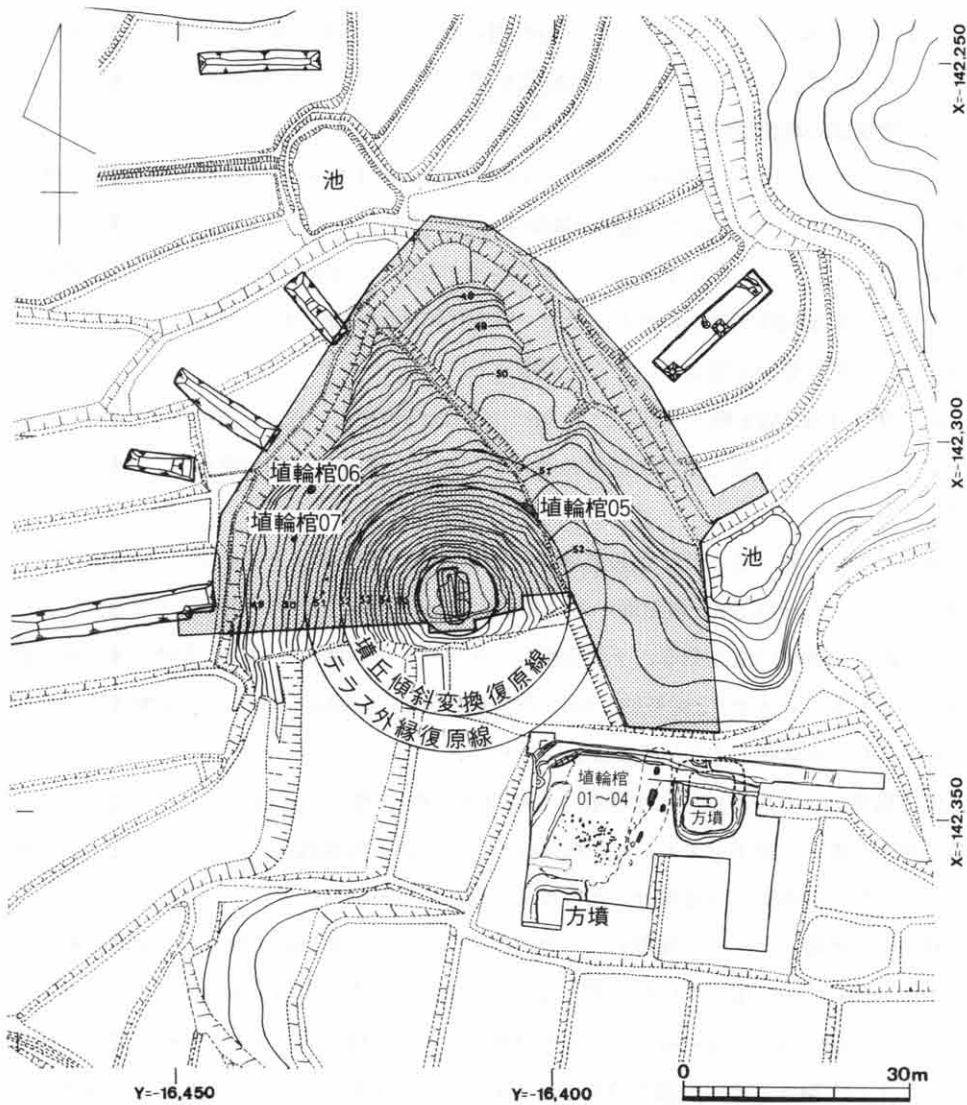
また、後述する内部主体の遺存深度を考慮すれば、墳丘部は全体的に後世に相当量の土砂が流出している可能性があり、実際、近年、松林→芋畑→竹藪として土地利用されている。

このため、築造当初の形態をどの程度反映しているか疑問が残るが、現地形を詳細に観察すると、墳丘勾配の傾斜変換点が同一レベルでめぐっているわけではないが、およそ墳丘最高点より下位5.5m(標高50.0m)に存在することが確認できる。これより周囲は、わずかな平坦面を経て幅の広い不整プランの緩傾斜面となり、やがて比高差2～5mの崖地形となって現水田(沖積地)に続くことから、古墳(墳丘)の基底をこの傾斜変換点に求める



第1図 調査地位置図

- | | | | | |
|------------|------------|----------|------------|-----------|
| A. 吐師七ツ塚古墳 | B. 白山古墳 | C. 内田山古墳 | D. 音如ヶ谷古墳 | E. 西山塚古墳 |
| F. 幣羅坂古墳 | H. 石のカラト古墳 | 36. 瓦谷古墳 | 37. 上人ヶ平遺跡 | 38. 瀬後谷遺跡 |



第2図 古墳周辺地形図(調査区内の等高線は掘削調査前の現況地形を示す)

と、直径25~30m程度の中規模な円墳となる。

墳丘の外部施設として、現状では段築は確認できず、葺石は認められない。墳輪については、元位置を保つ個体はないものの、墳丘周囲及び墳頂部盗掘坑から相当量が出土しており、その分布の偏りから墳頂部及び墳丘裾の外周に墳輪列がめぐっていたことを想定できる。

古墳と周辺地形を画す外郭施設としては、先の傾斜変換点とそれに続くわずかなテラス状地形が認められるにすぎず、少なくとも平野側に面する古墳の北半部に周溝(周濠)は存在しない。ただ、比較的残りのよい北西部では、傾斜変換線に沿う幅20cmの小規模な溝

が円弧長約8mにわたって遺存し、その外周に小ピット3基が同一円周上を1.8m間隔で並んだ状態を確認した。小ピットは柱痕穴を残しているため、木製樹物の可能性もある。

(2) 墳頂部の埋葬施設

墳頂平坦部(現状での直径10.0m)のほぼ中央に南北を主軸として、東西に隣接する埋葬施設2基を検出した。両者は、墓壙の隣接する側が重複しており、その切り合い関係より、西側が古く(第1主体)、やや遅れてそれに並行するように東側の施設(第2主体)が構築されるという先後関係が認められる。ただ、両主体の中間に墳頂中心が位置することから、当初より2棺並葬を予定していたことが窺える。

a. 第1主体(粘土槨) 現状では、粘土槨のほぼ中央に、棺の主軸方向に長円形の盗掘坑があり、また北西と南端に近年の芋穴が存在し、遺構の一部が壊れている(第3・4図)。

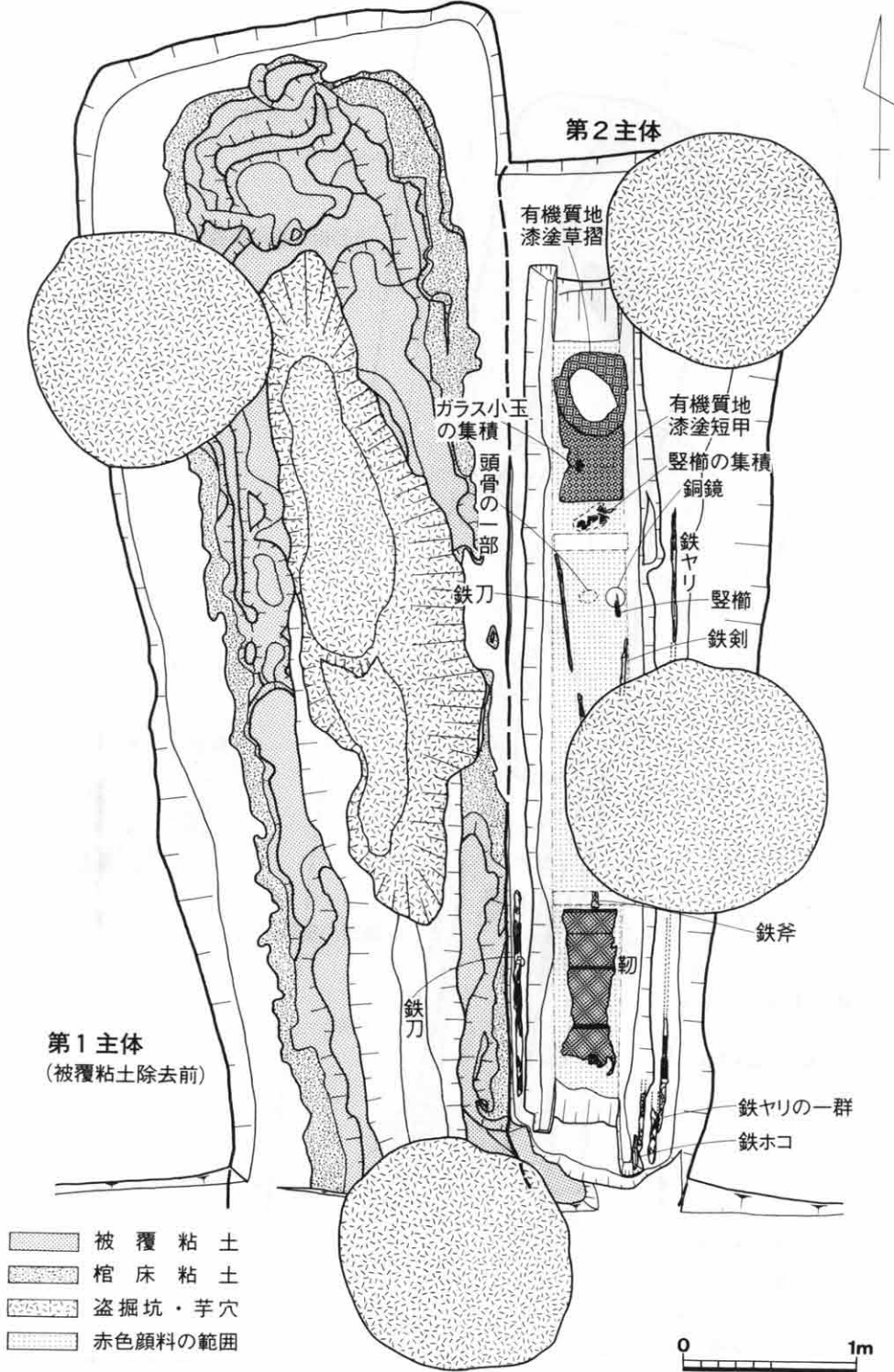
墓壙は2段に掘り込まれ、上段墓壙は、南北に長い長方形プランを呈し(検出面での長辺約7.8m・短辺約2.5m・検出面からの深さ約0.3m・主軸方位N9°W)、四壁の立ち上がりの勾配は一律約63度を測る。下段墓壙は、平坦な上段墓壙底の中央に主軸を揃え横断面逆台形状に掘り込まれ(上縁長約6.8m・同北幅1.2m・同南幅0.9m・上段墓壙底からの深さ約0.5m)、長側壁と底部が直線状を呈する。

槨の構築は、下段墓壙底に小礫混じりの粗砂を敷き(厚さ約10cm)、この上に灰白色の精良粘土を置いて棺床とする。この棺床粘土は、一部上段墓壙底にかかり、上面は中心軸に向かい強く内傾し、棺底部分で非常に薄くなる。棺材は残っていなかったが、棺床粘土に残された痕跡からみて、典型的な割竹形木棺ではなく、底部が平坦に近い扁平な断面形の木棺(舟形など)を用いていたと考えられる。棺底には赤色顔料が薄く塗られ、上外方に立ち上がる側壁部にも認められた。棺の設置後、その長側部分の窪んだ空間に粘土を裏込めし、やや内傾するその上面を棺長側の遺物床とする(実際、ここには鉄ヤリが副葬されていた)。

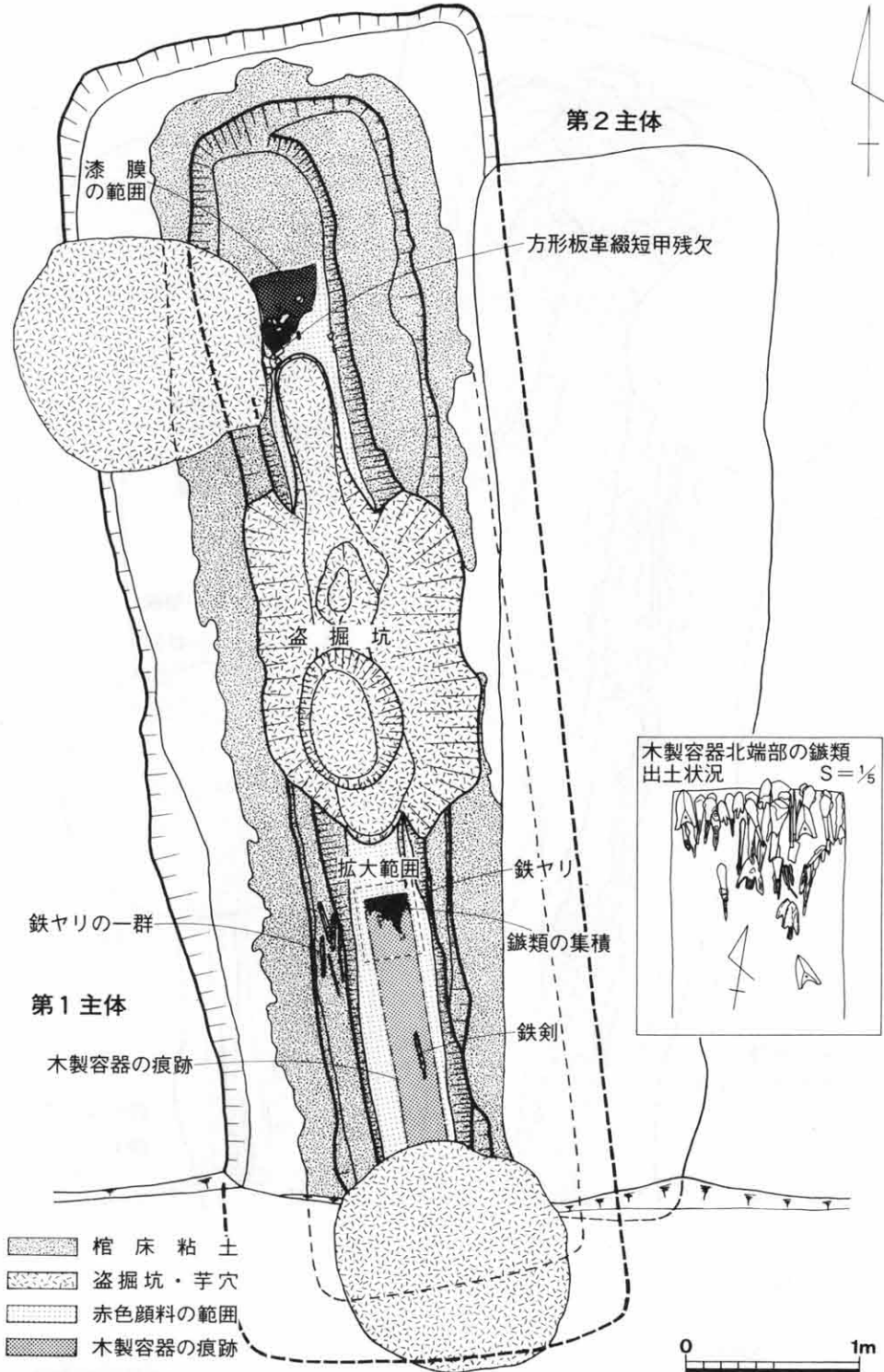
被覆粘土は、棺床粘土よりやや粗悪な粘土を使用し、上段墓壙底にのびる棺床粘土を覆い隠すことなく、その内方から棺をおおうが、現状ではその中央部が棺の腐朽にともなって大きく陥没している。

棺の北小口では、顔料及び有機質(漆膜?)が直に終わってから、北側の棺床の立ち上がりまでの0.7mの間に別の粘土がつめられていた。ここに、粘土による小口(小口板)の閉塞(閉塞支持)を想定できる。ただ、南小口・棺内仕切板の状況は攪乱等で確認できなかった。

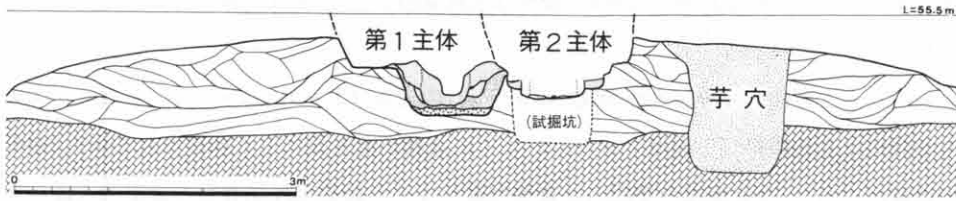
なお、盗掘坑以南の棺底に幅25cm、長さ145cm以上の長方形の変色域があり、その形



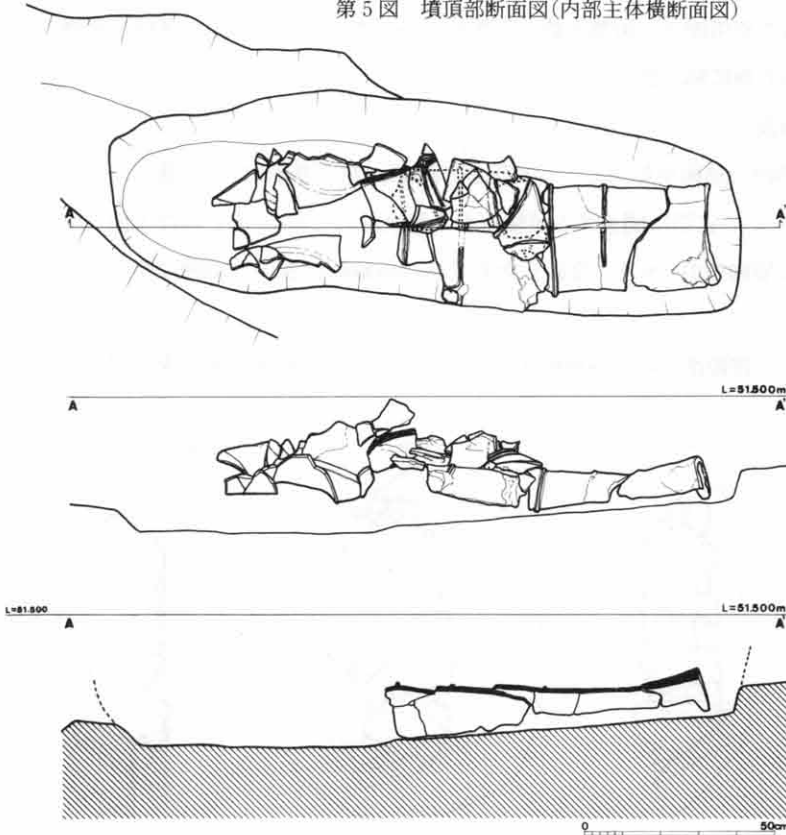
第3図 内部主体実測図(1)



第4図 内部主体実測図(2)



第5図 墳頂部断面図(内部主体横断面図)



第6図 輪棺05実測図

状などから赤色顔料と副葬品(鉄類=弓矢中心)を納入した木製容器の痕跡と推定できる。

b. 第2主体(木棺直葬墓) 第1主体の東側に主軸をやや東に振って(ほぼ真北)設定された埋葬施設で、北東隅と中央東寄りを芋穴で攪乱されていた。盗掘されていない(第3図)。

墓壇は2段に掘り込み、上段部分は前者に比べやや小規模で、若干北に開く矩形ぎみの長方形を呈する(検出面での主軸長6.1m・北側幅約1.8m・南側幅約1.8m・検出面からの深さ約0.4m)。下段墓壇は、上段墓壇底の中央部をさらに2段に掘り窪め、その上段部分は棺を設置した後、裏込めして棺材を安定させ、棺長側の遺物床を形成する。下段墓壇の下半部分の平面形は、棺の規模に一致し(最大長5.2m・幅約0.7m)、両小口側は長側板の形態に合わせ突出する。

棺は、下段墓壇下半部の形状から組立式箱形木棺(内法長4.3m・同幅約0.4m)で、両小口は、長側板の内方に小口板をはめる。平坦な下段墓壇底(=棺底)には側板部分(厚さ8cm)を除き全面に赤色顔料が残る。ただ、顔料の空閑部分があるので、棺内長軸線上をほ

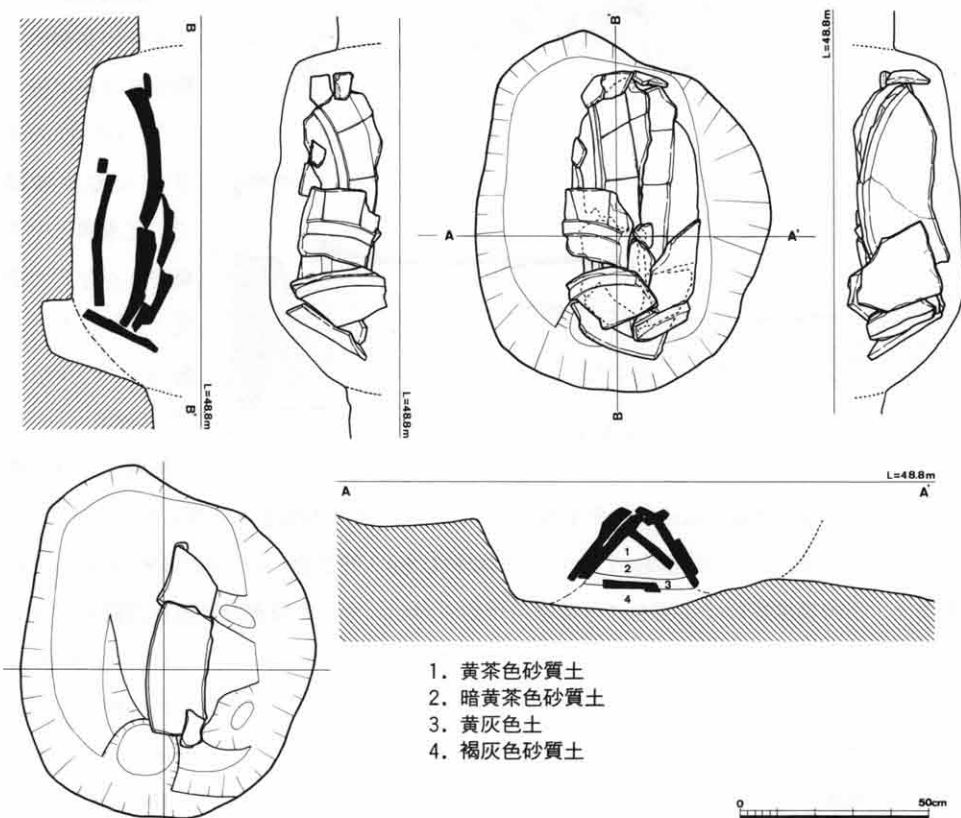
ぼ三等分するように2か所に仕切板(板厚は北仕切板10cm・南仕切板8cm)を入れたことがわかる。

棺内は、この仕切板で3つの空間に区分され(内方長は北から1.1・1.95・1.1m)、中央の空間には赤色顔料が一層厚く塗られ、ここに遺骸が北を頭にして埋葬されていた(頭骨の遺存による)。南北両端の空間には遺骸埋葬はなく、副葬品埋納専用の副室的な様相を呈していた。棺長側縁の平坦面は、遺物を置いた場所であるが、西側では第1主体の墓壇に規制され、東側と非対称に幅が狭く造られている。

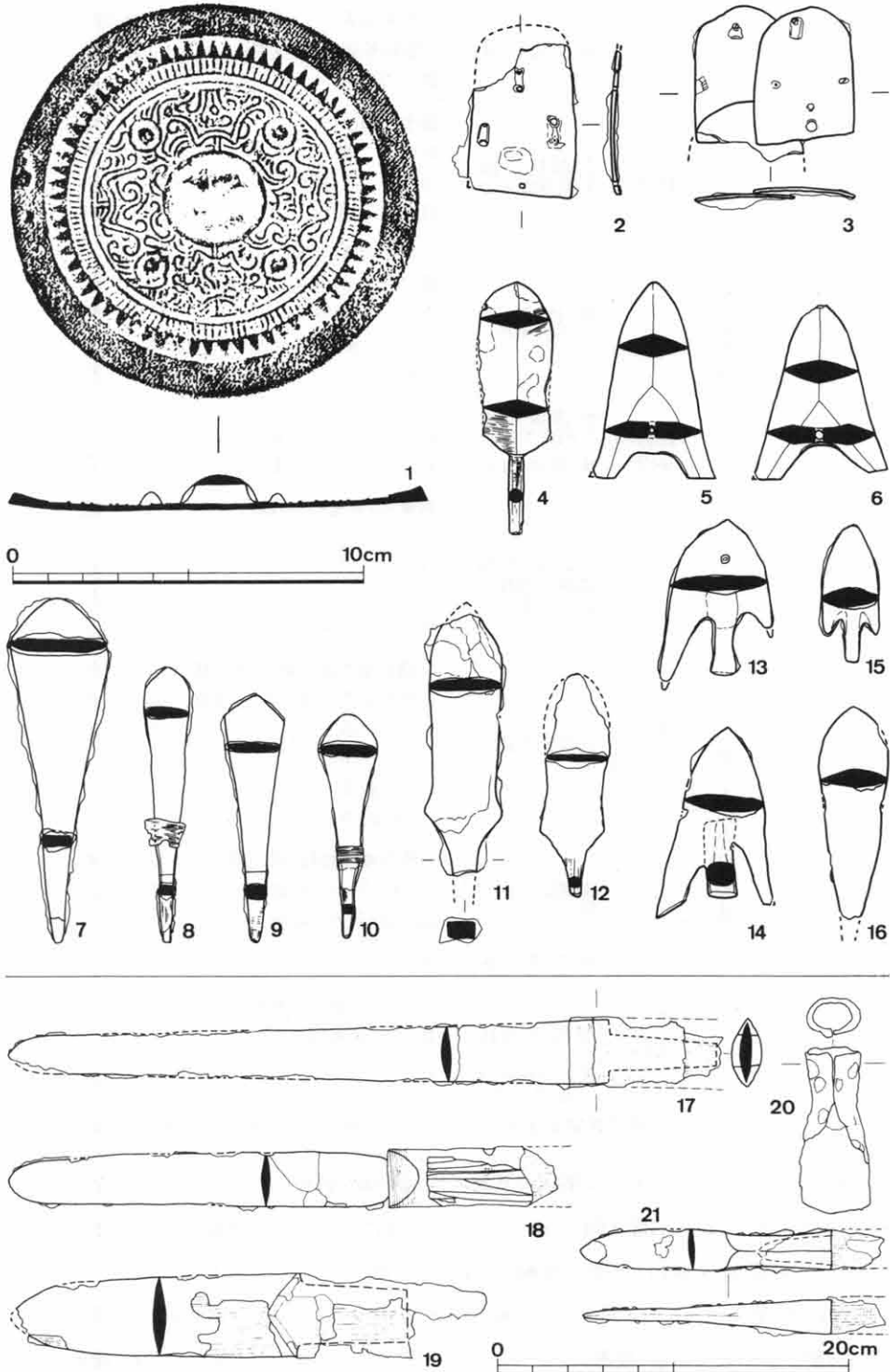
(3) その他の埋葬施設

この他、墳丘裾の周囲で埴輪を転用した埋葬施設(埴輪棺)を3基検出した(第6・7図参照)。過去の調査でもこの古墳に関連する埴輪棺を4基検出しており(第2図の古墳の南外周調査区に位置する埴輪棺01~04)、今回を含め7基の埴輪棺が古墳の周囲に群在することが判明した。

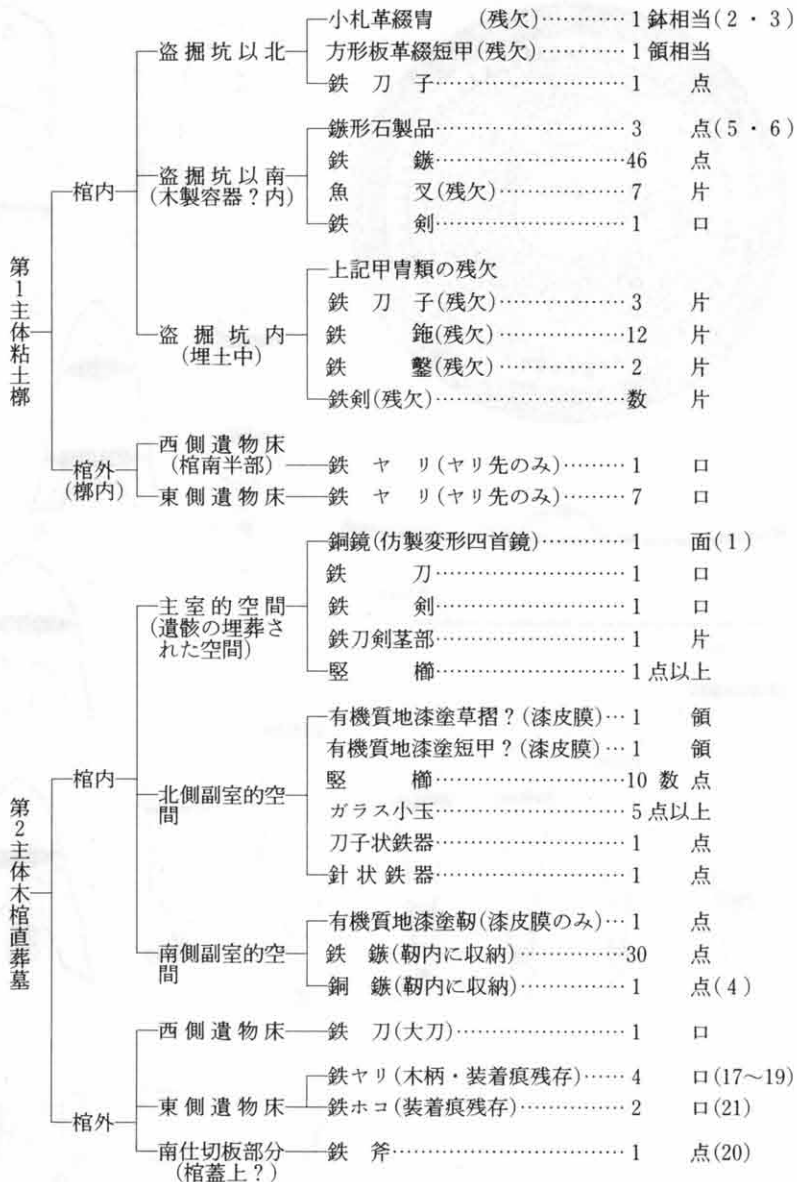
埴輪棺05(第6図)は、被覆部分にのみ埴輪が用いられ、鱗付円筒埴輪1個体を半截した



第7図 埴輪棺06実測図



第8図 主要遺物実測図(2・3・5~8・10・11・13~15. 第1主体, 他は第2主体)



内部主体副葬遺物出土一覧(表末の数字は第8図の図面番号に対応)

ものを連繫させ、さらにもう1個体の普通の円筒埴輪を破碎したものですきをふさいでいる(棺残存長1.3m・同最大幅35cm)。小口の閉塞に用いられた埴輪片の中には、直弧文(忍ヶ岡系対称文)を線刻した盾形埴輪(佐紀陵山古墳タイプ)が含まれている。

埴輪棺06(第7図)は、巨大な蓋形埴輪の円筒基台から笠部にかけての破片を用い、巧みに打ち割って棺底及び蓋(被覆施設)としたもので、他に例をみない構造である(棺最大長76cm・同幅37cm)。転用された蓋形埴輪は佐紀陵山古墳タイプで、同型の破片(立飾部も含

む)が墳頂盗掘坑からも出土しており、本来の樹立位置が推定できる。

埴輪棺07は、特殊な壺形埴輪を用いたもので、舟底形掘形を伴い口縁部が横たわっていたことから、一種の埋葬施設(埴輪棺)とみなした。現状では、体部の大半を失い、口縁の閉塞方法も不明だが、1個体を棺本体としていた可能性が高い。使用された壺(または壺形埴輪)は、二重口縁の屈曲部にタガ状突帯を巡らせ、2次口縁は大きく内湾し、1次口縁と体部外面をヘラ描きによる鋸歯文と弧帯文(一種の直弧文)で加飾する。

3. 出土遺物

出土遺物としては、内部主体に関わる副葬品及び墳丘内外各所から出土した埴輪類がある。これらの遺物は、現在、整理中で、ここでは、墳頂部の内部主体の副葬品についてその出土地点と数量を記すにとどめる(内部主体副葬遺物出土一覧参照)。

4. おわりに

今回の調査成果を簡単に列挙すると以下のように要約できる。

(1)古墳は、丘陵の先端に立地する。このため墳丘の大部分は基盤層を整形して築造され、人工的な盛土は墳頂部付近に限られる。現状では段築は確認できず、ほぼ正円を描く傾斜変換線を墳丘基底とすれば、直径30m前後の円墳となる。外部施設としては、墳頂部及び墳丘裾に埴輪列・木製樹物がめぐっていたようであるが、葺石は敷かれない。

(2)内部施設に関しては、墳頂部で主軸を南北に揃えて東西に並列する埋葬施設2基を確認した。両者には西側の粘土槨が構築された後、東に接して木棺直葬形式の施設が追加埋葬されるという先後関係が認められるが、その配置関係より築造当初から2棺並葬が予定されていた可能性が高い。粘土槨は下段墓壙を棺床とするタイプで、舟形木棺を用いる。

(3)過去の調査も含め、墳丘の周囲(墳丘傾斜変換線より外周)に埴輪棺が複数(7基)列状に群集することが明らかになった。このうち、墳丘の北西側で検出した埴輪棺(6号棺)は、閉塞のみならず棺本体にも同一個体の蓋形埴輪を使用しており、他に例がない。

(4)出土遺物には、古式の鉄製甲冑や韌などの漆塗りの有機遺物・豊富な鏃(鉄鏃・銅鏃・石製品)資料・佐紀陵山型式の各種形象埴輪など、注意すべきものが多く含まれている。

(5)第1主体の被葬者の死を契機として造営されたこの古墳の築造時期に関しては、内部施設の構造・副葬品の内容・埴輪類の特徴などから、ほぼ4世紀後葉(古墳時代前期後半)に求めることができる。

(いが・たかひろ=当センター調査第2課調査第3係調査員)

聖 域 区 画 小 考

小 池 寛

1. はじめに

古墳時代の研究は、主に「墳墓」の考古学的調査によって進展したと言っても過言ではない。その研究対象は、土器・埴輪に代表される「土」、武器・武具に代表される「鉄」、石棺・石室に代表される「石」に限られ、それらによってのみ古墳にかかわるすべての葬送儀礼や墓前祭の内容を規定し、理解しようとする傾向にあった。しかし、1988年を前後して調査が行われた奈良県橿原市四条古墳と同天理市小墓古墳、及び愛知県西春日井郡師勝町能田旭古墳の周濠内から「木製樹物」と呼ばれる木製品が出土した。その中には笠形・杭・石見型・鳥形・翳形の各種が含まれ、埴輪以外の樹物が墳丘や墳丘周辺にあったことを裏付けた。これらの発見によって「土・鉄・石」製品のみで考えられてきた葬送儀礼や墓前祭に対する認識、そして、埴輪のみによる墳墓区画方法に多くの問題を投げかけたことは言うまでもないが、墳頂及び墳丘周辺で行われたであろう首長権の継承儀礼についても再考を促すにたる重要な調査成果となった。

小文では、従来の研究成果をもとに、新事例が増えつつある聖域区画^(注1)について見解を述べるとともに、葬送儀礼や墓前祭を行ったと考えられる、いわゆる「陸橋部」についても若干の私見を述べたいと思う。

2. 「聖域」区画についての研究小史

稲作農耕の到来は、生業である狩猟・採集の比率を著しく低下させ、生活道具や行動様式・精神生活に至るそれまでの生活基盤を根底から変動せしめた。特に、「穀霊」の概念は、農事に伴う祭祀形態を規定し、弥生時代の精神生活のあり方に強い影響力を持った。弥生時代の聖域区画についての研究は、金閔恕によって勢力的に進められた。氏は、大阪府和泉市池上遺跡から出土した鳥形木製品に着目し、その成立を専門的農業集落の成立する弥生時代中期にもとめた。また、秋葉隆の朝鮮半島での村・寺院に木刻の鳥を付ける神杵研究をあげ、魏志東夷伝馬韓の一節にある「蘇塗」との関連を指摘した。更に、部族ジャーマンによる農耕儀礼こそ弥生時代の精神生活の中心であった可能性を言及し、『奈良県石見遺跡は、古墳時代に属するとは言え、古い祭場の型を遺している。しかし、時が遷

り、部族シャマン達の間から特権的司祭が登場することによって、その祭儀は社会における主導的な意義を漸次失って行く。それとともに、祭場もまた、特権的司祭の奥津城、すなわち、古墳の祭りにその場を移して行く。鳥の霊力も、それ以降の段階では、むしろ、死霊運搬に発揮されるようになる』ことを指摘した。氏はまた、前方後円墳の墳形起源論について考察を行う中で Siberia, Podkamennaya Tunguska 盆地における Evenk 人のシャマンテント(1920～30年代)を詳しく検証したうえで、『前方後円の平面形が、弥生時代の墓制を通じて徐々に形成され発達したものではなく、弥生時代の祭場の形を踏襲し、その祭儀が最終的に独りの司祭によって統括された後、その司祭の死に際して、祭場に墳丘を盛ることによって成立したのではないかと憶測する。祭儀の場が、後に王の奥津城となり、墳墓として発達して行くという想定は、mastaba の成立に関する Frankfort, H の考察にもうかがうことができるであろう』と述べ、祭場である「聖域」が前方後円墳と言う特異な形態を有する葬送儀礼の場としての「聖域」へと変遷したことを推論した。

一方、古墳時代の聖域区画の研究は、埴輪研究によって進展した。坪井正五郎の「埴輪柴垣説」をはじめ、和田千吉の「古墳装飾説」など多くの論考が提出されたが、埴輪による聖域区画論を墳丘調査の実例から考察したのは、後藤守一であった。以後、埴輪研究は、起源論・編年論・分布論の観点から飛躍的に進んだ。他方、奈良県天理市布留遺跡の調査では、円筒埴輪・朝顔形埴輪とともに櫛・滑石製勾玉・滑石白玉・砥石が出土し、布留川の扇状地に立地することから、水に関する祭祀を行った可能性が指摘されるとともに、埴輪が墳墓以外の「聖域」を区画する目的にも使用されたことを示した。1979～80年にかけて行われた長岡京跡右京第26次調査では、今里車塚古墳の周濠が検出され、約4mを前後する毎に柱穴が確認された。周濠内からは笠形木製品とそれを樹立させる杭が出土し、埴輪とともに墳丘上に樹立されていたことが知られた。調査を担当した高橋美久二は、その後、小墓古墳・四条古墳の調査成果を踏まえて「木製の埴輪」論を詳細に述べた。また、駅家の入り口を区画する鳥形木製品に着目し、聖域区画論を展開した同氏の見解は、その後の研究に大きな影響を及ぼしたと言えよう。

以上が「聖域」区画についての研究小史であるが、埴輪が墳墓以外の聖域をも区画する目的で樹立された事例は、古墳時代の祭祀を考える上で重要な発見である。また、埴輪とともに墳丘区画に笠形木製品が使用されたことを民俗学・文献学を含めその存在を示唆した高橋美久二の一連の研究と四条古墳などの木製樹物の調査成果は、今後の聖域区画のあり方を考える上で極めて重要な見解として認識されている。

3. 木製樹物による聖域区画の類例とその傾向

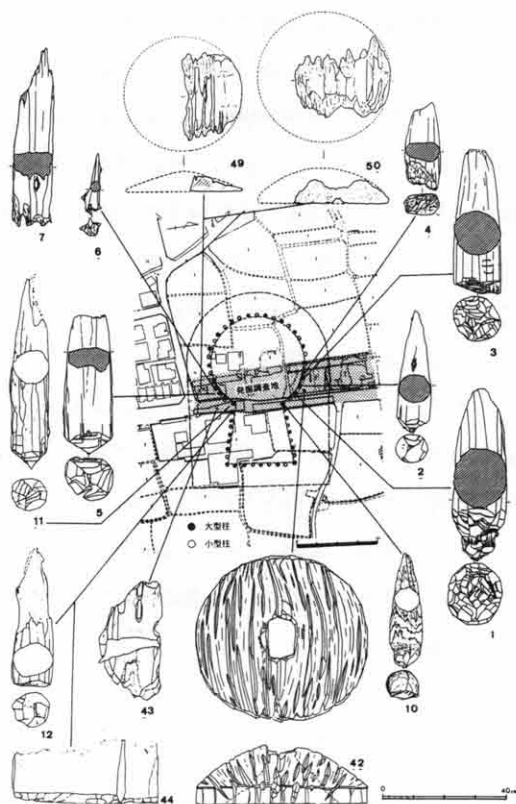
古墳の立地条件によって木製樹物の残存率に著しい違いがある。例えば橿原市四条古墳のように大量の木製品が出土する古墳もあれば、加悦町鳴谷東1号墳のように痕跡だけの古墳もある。笠形木製品に代表される木製樹物がどの程度の広がりをもって分布しているかは不明であるが、ここでは4例の古墳を概観し、その傾向について概述したい。

京都府長岡京市今里車塚古墳(第1図)

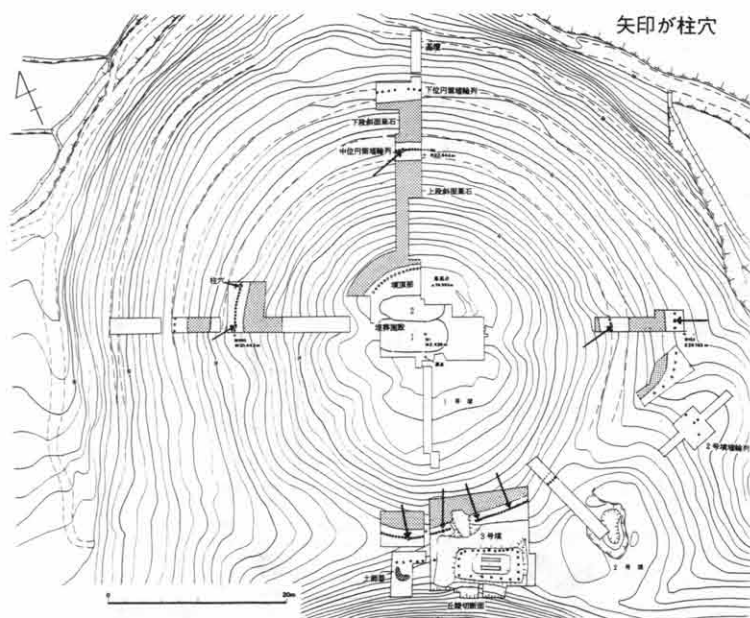
今までに7回の発掘調査が行われ、後円部の直径は約46mと推定されている。出土遺物から5世紀前半の築造と考えられ、周濠内から川西編年のⅢ期の円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪・家形埴輪とともに笠形木製品が3点・杭が7点以上出土している。後円部埴輪裾には4m間隔で笠形木製品を樹立した杭ないし杭の跡が確認された。後円部の直径と杭間距離から笠形木製品が36点樹立されていた可能性が指摘されている。これら笠形木製品と埴輪群の位置関係については、埴輪裾には笠形木製品などの木製樹物が巡り、それより上段に埴輪列が樹立されていたものと考えられている。なお、柱根が4m毎に確認されている点を考慮すれば、両者は混在していた可能性もある。笠形木製品は概ね直径56cmの大型製品と40cmを前後する小型製品に分類でき、交互に配置されていたと考えられている。特に、大型製品の外縁直立部は、幅7cmにわたって平坦な面を削りだしており、笠形木製品がそのままの状態で樹立されたのではなく、外縁部に何らかの装飾があった可能性も指摘されている。

京都府加悦町鳴谷東1号墳(第2図)

過去、4回の発掘調査が行われ、5世紀前半の築造であることが確認されている。墳丘は、直径54mの円墳で谷に面した北側を2段に築成し、南側は1段に築成している。北側の埴輪列は、墳頂部を含めて3列、南側は2列確認されている。北側の



第1図 京都府長岡京市今里車塚古墳(注10より転載)



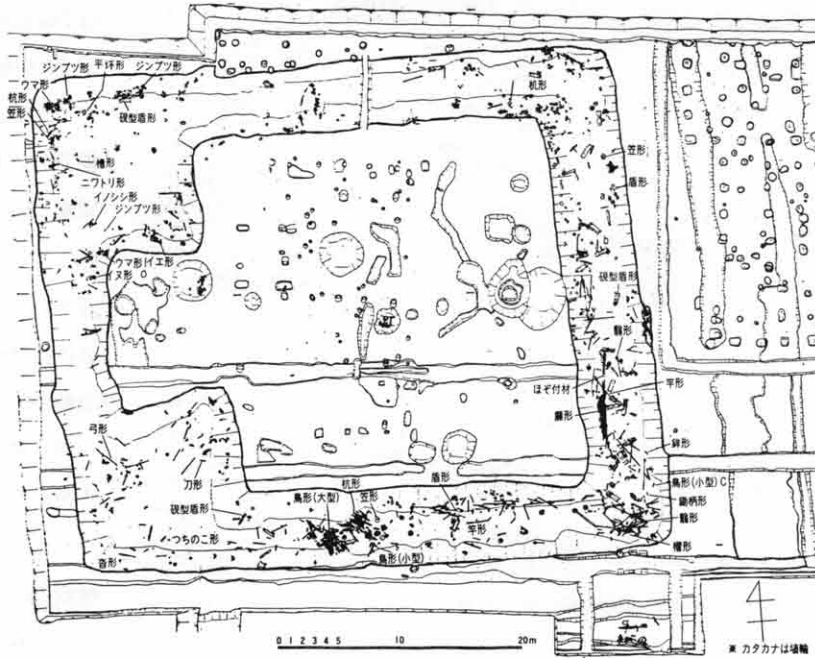
第2図 京都府加悦町鳴谷東1号墳(注12より加筆・転載)

下位円筒埴輪列は70cm間隔に円筒埴輪を置き、中位円筒埴輪列は、埴輪と埴輪が接するかのよう密に配置されている。特に、中位円筒埴輪列は、埴輪が11本樹立される毎に柱穴が穿たれており、土層断面から柱を建てた後に埴輪

が樹立されたことが判明している。埴輪の配置も一定の規則があり、柱間を2本の朝顔形埴輪で円筒埴輪群を均等に分割する方法と、柱間の中央に朝顔形埴輪を立て、円筒埴輪を2分する方法がある。中位埴輪列は、基本的に墳形に沿って円形を呈しているが、陸橋部のある南側は、2・3号墳との距離が極端に短いため直線的である。柱の掘形は円形ないし楕円形であり、柱自体の直径は15cm前後で柱間距離は4mである。木製樹物の存在は、柱穴から確実ではあるが、笠形木製品が樹立されていたかについては不明である。いずれにしても古墳を区画するために埴輪と木製樹物が混在していた点、そして、埴輪11本毎に柱穴が規則的に穿たれている点は、墳丘区画が計画的に行われたことを示す好例であろう。なお、それらの状況は、金閨の指摘どおり祭儀の場から王の奥津城へと変化した経過を示すものとして重要であろう。^(注13)

奈良県橿原市四条古墳(第3図)^(注14)

藤原京四条大路の延長線上にあたり、1987年に発掘調査が行われた。周辺には藤原京造営によって削平を受けた古墳も少なくない。四条古墳は、一辺28~29mの方墳であり、西辺に長さ9m、最大長14mの造り出しが付く。墳丘の周囲には、長方形の二重の濠がめぐっており、内濠は東西約48m・南北約40m・幅約6m、外濠は64mの規模をもっている。内濠内から笠形46点・杭、石見型26点、鳥形3点、翳形2点、飾り板付き棒形(翳形・机形・竿形・杓形・鉾形・剣形など)などの木製品と人物形・家形・鹿形・猪形・鶏形・盾

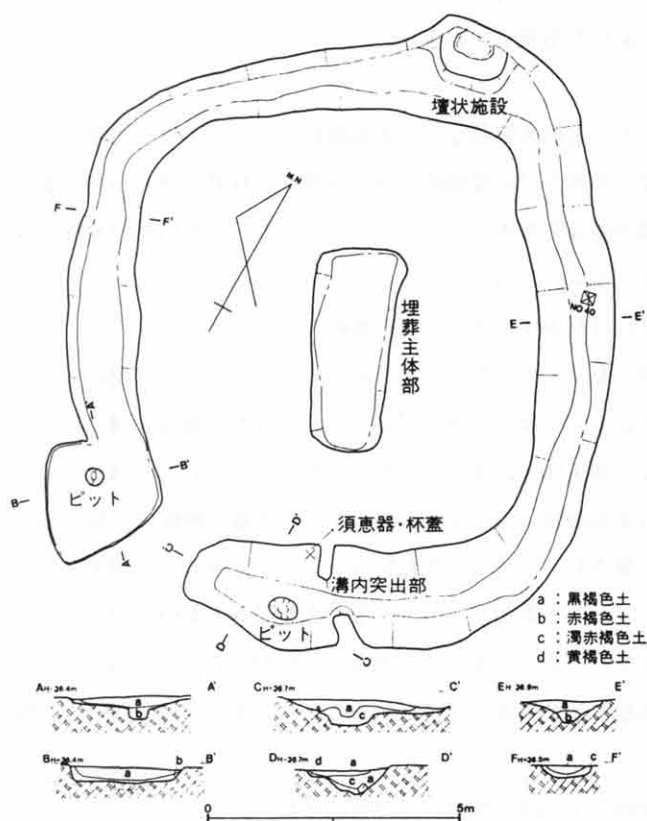


第3図 奈良県橿原市四条古墳(注14より転載)

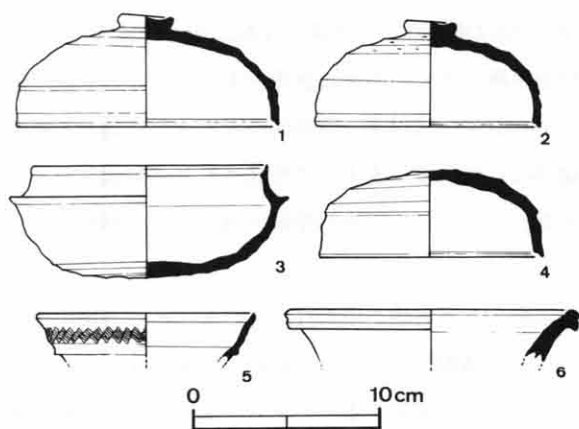
形・馬形などの多量の埴輪が出土している。また、TK23・TK47併行の須恵器が出土しており、築造時期を5世紀末に比定できる。木製品の出土は、内濠全体に広がりをもって分布しているが、『南の陸橋部に大型鳥形と多数の杭形&笥形及び多量の須恵器、埴輪の出土』が見られる。埴輪と木製品の相伴関係については、墳丘上部を削平され、元位置を保っていないため、先述した加悦町鳴谷東1号墳のように把握できないが、南側陸橋部に鳥形が多く出土している点と西側の造り出し部に鶏形埴輪を含む動物形・人物形埴輪が多く出土している点は、陸橋部と造り出しのもつ意義などを考える上で重要な事実である。

京都府城陽市芝山遺跡3号墳(第4・5図)

芝山遺跡は、過去2回の発掘調査が行われ、基本的に古墳時代初頭から平安時代の遺構・遺物が検出されている。3号墳は、3基からなる低墳丘方形墓であり、南北11m・東西10mの規模を有している。墳丘は後世の削平を受けているものの、埋葬主体部が良好な状態で残存している点から低かったと考えられる。北側周溝内には、2.2m×1mの長方形を呈する壇状施設を設け、中央に1m×0.5mの土壇を穿ち、第5図1～3の須恵器を埋納している。また、周溝は完結せず、南側に陸橋状に掘り残した部分がある。陸橋状施設の西側の周溝端部は、2.2m×2.08mの範囲に掘り広げており、中央では0.35mのピットを検出した。一方、東側には周溝端から2.8m部分に溝内へ突出するように掘り残された溝



第4図 京都府城陽市芝山遺跡3号墳



第5図 京都府城陽市芝山遺跡3号墳出土遺物実測図
(1~3. 溝内壇上施設 4~6. 溝内)

内突出部があり、第5図4の須恵器が墳丘側周溝内で出土した。また、周溝の深さは基本的に0.4mであるのに対し、溝内突出部以西は0.7mと深く掘りこまれている。また、中央部分でも西側とほぼ同じ大きさのピットを検出した。これらのピットは、土層断面から古墳築造に伴って穿たれたことは確認されるが、周溝内の上層である黒褐色土には明瞭なピットの埋土を確認できていない。しかし、地山を20cm程度掘り込み、一定の長さをもった柱を樹立することは極めて困難であり、樹立直後(葬送儀礼終了直後)に抜き取られた可能性も考慮する必要がある。出土した須恵器から5世紀後半の築造と考えられる。以上のように3号墳は、北側周溝内に須恵器を埋納した壇状施設をもち、南側には陸橋状施設、そして、それを挟むかのように周溝端にピットをもつといった極めて特徴的な古墳であることが判

明した。それらの施設をもった類例は、現時点では確認されていないが、陸橋部をはさむように木製樹物が立てられた可能性を指摘しておきたい。

以上、4例について概観したが、笠形木製品などの木製樹物が出土している古墳には、大阪府羽曳野市応神陵古墳^(注17)、愛知県西春日井郡師勝町能田古墳^(注18)、奈良県天理市小墓古墳^(注19)、同磯城郡三宅町石見遺跡^(注20)、京都府園部町塚本古墳等^(注21)があるが、一方、木製樹物の痕跡を残す類例は、調査の増加に伴い増えるものと考えられる^(注22)。

なお、これらの類例を概観すればおおよそ次の3点に要約できよう。

(1)木製樹物には四条古墳例に見るように数々の種類があるが、比較的多く認められるものに笠形木製品がある。4世紀末～5世紀初頭に築造された奈良県北葛城郡河合町佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡には、高床住居に貴人を象徴するかのように衣蓋(きぬがさ)が描かれている。また、奈良県日葉酢媛陵古墳出土例に見るように衣蓋形埴輪は、他の器財埴輪の中であってより精緻に作製され、出土量も比較的多い。これは権力を誇示するための道具立てとして重要視されていたことを示している。笠形木製品が木製樹物のなかで比較的広く分布する要因には、まさに「貴人を象徴する天蓋」に祖形があったため、他の道具よりも直接的に被葬者の階層を示す位置づけが行われていたと考えられる。今後の類例の増加に期待したい。

(2)墳丘傾斜面からの木製樹物の出土は、現時点では確認されていないため、器種によって樹立位置に大きな相違点があるのかは不明であるが、四条古墳のように陸橋部に鳥形木製品が多く出土する事実には注目しなければならない。陸橋部は、古墳上及び周辺で行われた葬送儀礼の重要な通過地点として特別な意味をもっていたと考えられる。古墳を神聖な場として区画することを考えた場合、他は周濠ないし周溝で聖域区画が可能であるが、陸橋部については概念上の聖域と俗域を区画できず、相互に影響をおよぼすことを意図的に避けなければならなくなる。そのため、弥生時代以来、聖域区画を行った「道具」としての「鳥」形木製品が多用され、陸橋部に比較的多く集中して確認されたと解釈したい。また、芝山遺跡3号墳検出の陸橋部を挟むピットは、旧来の聖域区画の方法が形骸化したものと考えておきたい。

(3)現在、確認されている木製樹物が出土した古墳の墳形は、その多くが前方後円墳である。また、築造時期も5世紀を中心とした時期である。その傾向から勘案すれば、前方後円墳自体がある種の階層を表現していることは周知の事実であり、それに伴い木製樹物を立てて行う葬送儀礼も一定の階層にのみ許されたものであった可能性を指摘しておきたい。しかし、芝山遺跡3号墳のように低墳丘方形墓にまで木製の立てものが樹立された点

については、低墳丘方形墓に葬られた被葬者の社会的位置付けと深く関連があるものと解釈できよう。

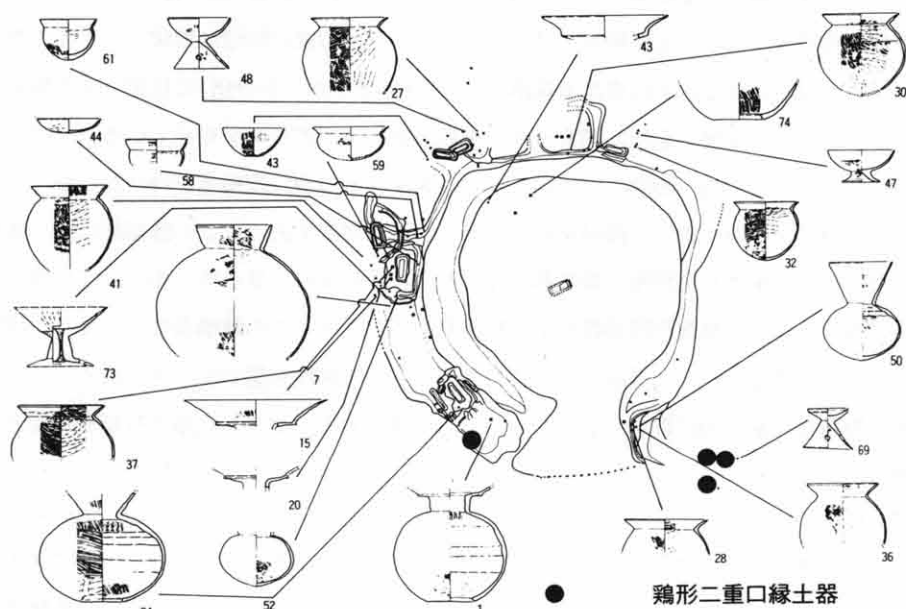
4. 陸橋部の成立と聖域区画

芝山遺跡3号墳は、後期群集墳の前段階に形成される低墳丘方形墓として認識できる。また、方形であり、低墳丘である点は、弥生時代に成立する方形周溝墓の系譜を引いていると考えてよい。しかし、各々が成立する社会的背景には大きな違いがあるため、名称を別に設定し方形周溝墓とは区別しているのが現状である。寺沢薫は「方形区画墓^(注23)」と称し、布留O式から7世紀前半に至る伝統的な墓制であることを調査成果として提出した上で、大和政権の軍事的編成には組み込まれなかった家長ないし世帯層の墓制と考えた。また、長山雅一は大阪府長原古墳群の調査から「5世紀型群集墳^(注24)」と称し、大王権に直接的に掌握されたものではなく、有力層を介在にして支配された世帯層を被葬者と推定した。更に、韓式系土器が周溝内や付近の集落から出土する点に注目し、大陸の先端技術を有した集団の可能性を指摘した。これらの研究では研究者毎に名称が設定されたが、名称の違いによる概念規定の違いを明らかにするには及んでいない。しかし、被葬者像について考察し、当時の支配体系について一定の解釈を行った点は、後出する後期群集墳を考える上で重要な研究成果となった。

芝山遺跡3号墳の祖形とも言うべき方形周溝墓の分布は、汎日本的な広がりを示し、特定地域の墓制ではないことが明らかになっているが、その成立時期は地域によって大きな差がある。現時点では、大阪府池上遺跡などに前期(第I様式新段階)に比定できる類例が確認されており、東海、北陸、関東へ中・後期段階に至り広がりを見せている。周溝には四隅に陸橋部をもつ型、四隅の内何か所かに陸橋部をもつ型、陸橋部を持たない型などがあるが、時期・地域によって傾向を見い出せないのが現状である。この陸橋部には、隣接する周溝内に埋納された供献土器の存在などから、葬送ないし墓前祭の場としての機能が想定されているが、複数の陸橋部をもつ周溝墓の場合、すべての陸橋部にそのような機能があったとは考えられず、遺跡ごとによって何らかの規則性を想定すべきである。

方形周溝墓は基本的に群をなしており、一辺の溝を共有したり、完結する周溝が切り合う場合が多く見られる。これは、方形周溝墓が個人の墓でないことを示唆するものであり、世帯共同体の中でも優位に立った家長世帯の墓制と考える一つの根拠にもなっている。また、4本の溝によって埋葬施設を区画する形態が初期段階に多く見られることは、すでに指摘があるが、大半の方形周溝墓の場合、陸橋部が隅部のいずれかに多く見られる傾向にある。その要因は溝と溝との共有に関連しており、陸橋部は直線的な4本の溝で区画する

ことによって生じた、いわば、自然発生的な出現であると言える。そして、それ以後、葬送儀礼や墓前祭の場としての性格が加わったと考えられる。その時期については、周溝内にそれらを傍証する遺物ないし施設の存在確認が必要な条件であるため、類例を集成し検討を行うべきであるが、大阪市山之内遺跡^(注25)の発掘調査例は、それを考える上で重要な成果を提出した。当該遺跡では、弥生時代中期の一辺7mの方形周溝墓を検出し、隅部にはなく周溝西辺中央部に幅1.2mの陸橋部が確認された。周溝内から供献土器としての壺・甕が出土しており、この陸橋部が葬送儀礼や墓前祭の場としての機能をもっていた可能性が指摘されるとともに、陸橋部の成立時期についても再考を促す成果となった。また、岸和田市下池田遺跡^(注26)で検出された直径6mの円形周溝墓には、N-45度-Wラインを中軸とする幅3.4mの陸橋部が南東側で確認され、周溝内に朱を塗布した弥生中期末から後期初頭に比定できる高杯・壺・甕・鉢などの土器が確認された。この陸橋部もまた、葬送儀礼や墓前祭の場としての機能をもっていたことが考えられる資料であると同時に、弥生時代後半期に円形区画の周溝墓が存在したことが明らかになった。この2例は、方形周溝墓の隅部に陸橋部が検出される事例と異なり、陸橋部が周溝の一辺ないし一部を掘り残して設定されており、陸橋部の成立時期をおさえる確実な類例として重要であるばかりでなく、その初源形態を考える上で有効な調査成果である。また、陸橋部が葬送儀礼や墓前祭の場として確実に意識され、設定されたことを示す事例としても注目できる。なお、これら2

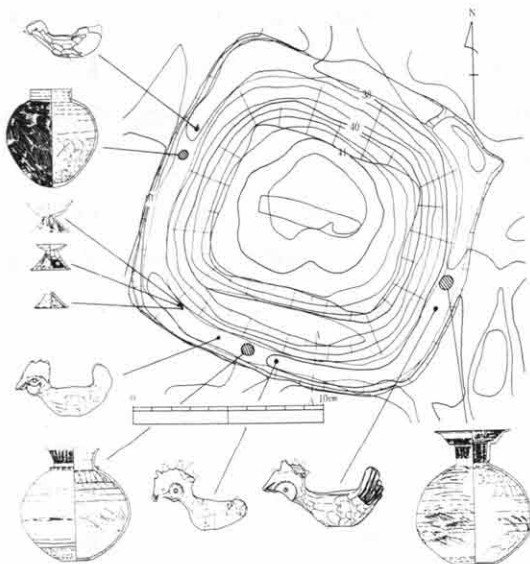


第6図 福岡県小郡市津古生掛古墳(注27より加筆・転載)

例の周溝内には、木製樹物の存在を示唆する柱穴などは確認されておらず、鳥形木製品の初源が、方形周溝墓に代表される墓を「俗域」から区画する目的で使用されたのではないことを示す一つの根拠にもなるのではないだろうか。

古墳時代初頭になると、弥生時代に成立した陸橋部は、更に葬送儀礼・墓前祭を執り行う空間としての色彩が強くなる。陸橋部は拡張され、埋葬施設を有する主丘部に対して特別な空間としての表示が出現する。福岡県小郡市津古生掛古墳^(注27)は、全長33m・後円部径29m・くびれ部幅6m・前方部長4m・前方部幅12mの規模を有する前方後円墳で、墳丘裾をめぐるように方形周溝墓6基・円形周溝墓1基・木棺墓3基が併存している。墳丘を取り囲む周溝は、基本的に主丘部から前方部にかけて掘られているが、前方部前面には周溝は確認されておらず、築造当初から陸橋部を意識的に削り出していたと考えられる。周溝内からは、西新式に分類できる甕・二重口縁壺・器台・鉢・高杯などが出土しており、庄内式新段階から布留式古段階に比定できる。本古墳で最も重要な点は、鶏形二重口縁土器が前方部を挟む周溝端(くびれ部)で確認されていることにある。鶏形二重口縁土器は4点出土しており、土器全面には元来、赤色顔料が塗布されていたらしく、胴部は中空体を呈し、底部を焼成前に穿孔している。定型化する以前の前方後円墳の前方部から鶏形土器が出土したことは、すでに鶏に対する概念が墳墓築造に際して定着していたことを示唆するものであり、葬送儀礼に重要な役割をもって何らかの方法で樹立され、「聖域」区画に使用されたと考えられる。一方、石川県加賀市吸坂丸山2号墳^(注28)は、一辺15mの方

墳で周溝内から古府クルビ式に比定できる壺形土器とともに鶏形土製品が4点出土している。2点は南辺中央部に3.5mの間隔を開け出土しており、他は東西両周溝中央部から一点ずつ出土している。鶏形土製品の底部は、棒の先端に装着できるように貫通せず穿孔している。この土製品は、周溝南辺中央部を境に2点ずつ配されており、南辺部中央に木橋などで墳丘内へ移動できるような施設が存在した可能性があり、それを挟むかのように左右に鶏形土製品を



第7図 石川県加賀市吸坂丸山2号墳(注28より転載)

木で樹立したものと考えられる。また、京都府与謝郡加悦町蛭子山1号墳^(注29)は、全長145mの前方後円墳で過去に4回の調査が行われた。第4次調査では、前方部平坦面から後円部の傾斜面及び墳頂部平坦面に設定された第1トレンチから柱穴と鶏形土製品が出土した。その地点は墳頂部の埋葬主体部に隣接しており、埋葬施設を先端に鶏形土製品を装着した木柱で取り囲んでいた可能性が指摘されている。

鶏は、夜を終焉させ、朝を呼ぶ鳥として重要であったと考えられており、墳墓上で行われた葬送儀礼にとっては必要不可欠な要素であったとされる。その鶏が、あたかも葬送儀礼の場としての陸橋部(前方部)を挟むように配されることは、陸橋部が特別な場所として認識されたことを示す根拠にもなる。また、蛭子山1号墳のように埋葬主体部に隣接した地点で柱穴とともに確認された鶏形土製品の存在は、墳丘自体がある種の首長権を継承する儀礼を執り行ったことを示すものと解釈できる。なお、吸坂丸山2号墳の報文中に「…鳥形木製品にも同様の柄穴があり、ムラや社の入口及び墓などの神聖な場所に立てられ…これが鳥居の原形といわれ、文字どおり鳥の居る鳥居」が成立し、同古墳にもその存在を示唆する見解があるが、鳥形木製品に表現された巫鳥と鶏形土製品の鶏では、それらに付加された概念に大きな違いがあり、一概にそれらを総合的に捉え、鳥居の原形とするにはさらなる民俗例や文献の調査を待つべきと考える。

以上、概観したように葬送儀礼や墓前祭を行う空間としての陸橋部の成立は、現時点では、大阪市山之内遺跡に見られるように弥生時代中期を上限としなければならない。しかし、今後、周溝内から出土する供献土器等の検討から更に遡ることは必至であろう。

弥生時代に成立した陸橋部は、古墳時代に至り小郡市津古生掛古墳に見られるよう「葬送儀礼の場」として墳墓に取り込まれ、以後、主丘部に対する「前方部」として発達した。その陸橋部を挟み込むように周溝内に鶏形土製品が配されている点は、陸橋部が神聖な場であることの標識とともに、特別な認識の基でその空間が利用されたことを示している。また、周溝は聖域である主丘部をいわゆる「俗域」から区画しているが、概念の上から俗域と面的なつながりをもった陸橋部は区画できないため、木製樹物ないし鶏形土製品を樹立したと考えたい。加賀市吸坂丸山2号墳でも木製の陸橋を中心に左右に2点ずつ鶏形土製品が配された可能性があり、これもまた区画と表示を目的にしたものであろう。

5. ま と め

笠形木製品の発見は、従来考えられてきた古墳時代の葬送儀礼研究に大きな影響を与えた。検出例はわずかではあるが、その多くは前方後円墳などであり、被葬者の階層と大きな関連があると考えられる。また、特別な概念をもった鳥形木製品が葬送と深く関連する

陸橋部に集中する傾向は注目すべき報告である。この陸橋部は、方形周溝墓の成立と同時に併存していたと考えられるが、明確な用途は確立されておらず、むしろ、自然発生的に出現したと考えられる。しかし、方形周溝墓の「隅部」ではなく「辺」に陸橋部が設定された時期をもって葬送儀礼や墓前祭を執り行う場としての機能が確立されたと仮定した場合、その時期に伝統的な葬法を積極的に改変するほどの社会的変動があったと見るべきである。

弥生時代の方形周溝墓は、共同体内における有力世帯層の墓として位置付けられるが、「古墳」築造は、より政治的な側面が強化され、絶大なる権力を誇示するために区画自体を厳重に行う必要が生じた。そのため、弥生時代には見られなかった木製樹物や鶏形土製品などが陸橋部を挟むように樹立されたのではないかと考えられる。

今後、類例の増加によって「木製樹物」は一般的認識として定着するものと考えられるが、分布範囲や時期設定など明らかにすべき点が多い。また、聖域区画の方法についても多くの問題点が指摘されるものと期待し、小考の終わりとした。

なお、本文執筆にあたり、日頃から御指導を賜っている金関恕氏、高橋美久二氏をはじめ、以下の方々から有益な教示を得た。文末ではあるが記して深謝いたしたい。

近江昌司、和田晴吾、置田雅昭、西藤清秀、田中清美、泉武、日野 宏、土橋 誠、伊賀高弘、天理考古学談話会諸氏、金曜会諸氏(敬称略・順不同)

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1 本文中で使用する「聖域」とは、非日常的空間を広く指し示している。

注2 金関 恕「弥生時代の宗教」(『日本考古学論集3 呪法と祭祀・信仰』吉川弘文館) 1986

注3 金関 恕「前方後円墳起源のなぞ」(『古墳の謎を探る』帝塚山大学考古学研究室) 1981

注4 坪井正五郎「埴輪考」(『日本考古学選集3 坪井正五郎集一下巻』築地書館) 1972

注5 和田千吉「埴輪圓筒は果して土留なるか」(『日本考古学選集4 大野延太郎+八木柴三郎+和田千吉集』築地書館) 1976

注6 後藤守一「埴輪の意義」(『考古学雑誌』第21巻第1号 考古学会) 1931

注7 置田雅昭「布留川のまつり」(『大和の国と天理の歴史 天理大学学報別冊1』天理大学学術研究会) 1985

注8 高橋美久二「木製の埴輪 再論」(『京都考古』第49号 京都考古刊行会) 1988

注9 高橋美久二「駅家の門」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注10 高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』京都府教育委員会) 1980

注11 高橋美久仁氏御教示による

- 注12 立命館大学文学部「鴨谷東古墳群第4次発掘調査現地説明会資料」1990
- 注13 金関 恕「神を招く鳥」(『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社)1982
- 注14 西藤清秀・林部 均「31四条古墳発掘調査概要」(『日本考古学年報40(1987年度版)』日本考古学協会)1989
- 注15 小池 寛「芝山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1987
- 注16 用語の概念規定については注15において触れているが、今後、詳しく行いたい。
- 注17 一瀬和夫「40大阪府羽曳野市応神陵古墳外堤」(『日本考古学年報41(1988年度版)』日本考古学協会)1990
- 注18 市橋芳則「20愛知県能田旭古墳」(『日本考古学年報40(1987年度版)』日本考古学会)1989
- 注19 泉 武「30奈良県小墓古墳(第1次)」(『日本考古学年報40(1987年度版)』日本考古学協会)1989
- 注20 末永雅雄「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第13集 奈良県)1925
- 注21 引原茂治・森下衛両氏の御教示による
- 注22 京都府木津町瓦谷古墳においても墳丘裾部で柱穴が確認された。伊賀高弘氏御教示
- 注23 寺沢 薫「矢部遺跡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49集 奈良県立橿原考古学研究所)1985
- 注24 長山雅一「長原古墳群の性格について」(『古代史論集 上』塙書房)1988
- 注25 大阪市教育委員会・財団法人大阪市文化財協会「大阪市立大学河海工学水理実験場建替えに伴う山之内遺跡発掘調査現地説明会資料」1986.12
- 注26 中村 浩・近藤利由「下池田遺跡—第2次発掘調査報告—」(『大谷女子大学資料館報告書』第17冊 大谷女子大学資料館)1987
- 注27 宮田浩之「津古生掛遺跡Ⅱ みくに野第二土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告—9—」(『小郡市文化財調査報告書』第44集 小郡市教育委員会)1988
- 注28 荻中正和「吸坂丸山古墳群」(『加賀市埋蔵文化財報告書』第20集 加賀市教育委員会)1990
- 注29 「史跡蛭子山古墳第4次発掘調査現地説明会資料」(『加悦町文化財調査現地説明会資料』13 加悦町教育委員会)1990.10.20

〈附記〉

脱稿後、土生田純之氏から有益な御教示を受けたが、本文に充分いかし切れなかった。福岡県鋤先古墳の羨門部にピットが穿たれており、墳丘上で検出されるピットすべてが区画を目的にしたものではなく、『日本書紀』推古天皇二十八年の条に記載された大柱の祭に類する性格も含まれることを認識した。^(注13) 同氏に感謝の意を表したい。

平成2年度発掘調査略報

5. 横浦古墓

所在地 熊野郡久美浜町字栃谷小字横浦他

調査期間 平成2年4月12日～7月20日

調査面積 約300m²

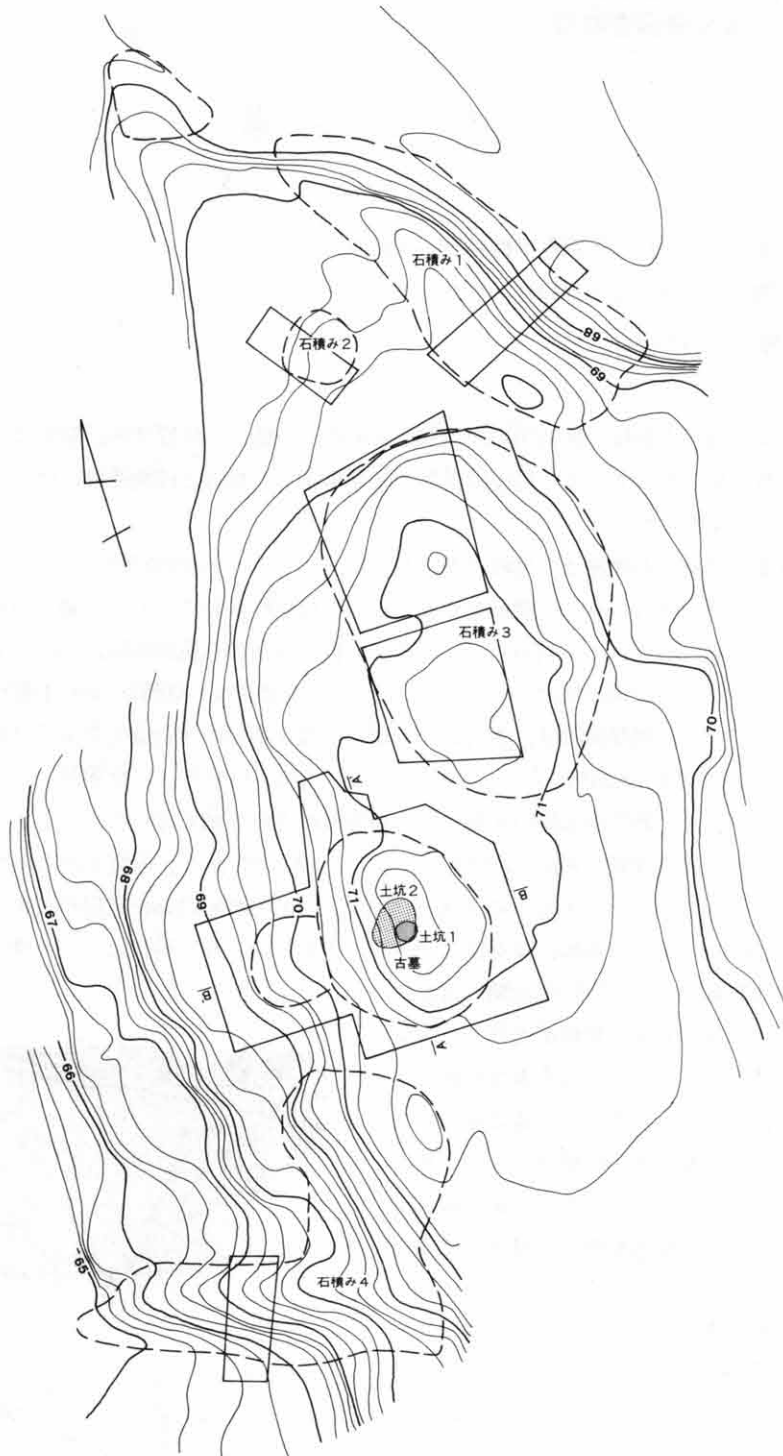
はじめに 横浦古墓は、栃谷川右岸の標高70m程の山稜上に位置する。調査は、農林水産省近畿農政局が行っている「丹後国営農地開発事業」の栃谷2団地造成に伴い、同局の依頼を受けて実施した。

調査概要 調査前の状況は、尾根の頂部及び斜面にマウンド状の石積み3か所と石塁状の石積み2か所が認められ、古墓群を形成している可能性が考えられた。調査の結果、その内1基が古墓であることが判明した。古墓は尾根の肩部から西側斜面にかけて立地し、南北7m・東西5.5mの楕円形のマウンドの西側に、南北3m・東西2.5mの不整円形の突出部をもっている。埋葬施設は、拳大から人頭大の礫を多量に含む盛土の頂部に掘られた一辺約60cm・深さ約15cmの土坑(土坑1)である。土坑1内からは、火葬骨、木炭、鉄釘が出土しており、火葬骨を木炭の充填した木製容器に入れて納めていたものと思われる。土坑1の下部には直径約1.6mの不整円形の土坑(土坑2)がある。土坑2からは木炭の小片のみが出土した。また、土坑1の上部には南北1.3m・東西1.1mの方形の石組を構築しながら、さらにマウンド全体に礫を積んでいる。古墓の造られた時代は、この礫中から出土した肥前陶器片より江戸時代前期と思われる。

まとめ 古墓は非常に規模が大きく、大量の石材を積み上げるためには大きな労働力が動員されたと考えられる。この墓に葬られた人は栃谷の村の有力者・庄屋クラスの人物であろうと思われる。また、墓の立地が西斜面の最高所で、栃谷集落を眼下に見下ろす場所であると同時に、西方浄土に望む場所であることや、埋葬方法が土葬ではなく火葬であることは、被葬者の宗教を表しているのかもしれない。
(森島 康雄)



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 横浦古墓地地形測量図(S=1/250)

6. 大田南・下後古墳群

所在地 竹野郡弥栄町字和田野
調査期間 平成2年4月18日～8月4日
調査面積 大田南古墳群約200m²、下後古墳群約1,000m²

はじめに 今回の発掘調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の和田野団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて実施した。

大田南・下後古墳群は、竹野川西岸に位置し、同一丘陵上には太田古墳群・大田南古墳群・下後古墳群など総数60基を越す古墳が確認されている。今回の調査では、大田南古墳群は群内に認められる古墳状隆起及び不自然な平坦面を試掘調査し、下後古墳群については昨年度調査した1号墳の北側に隣接する2・3・5号墳を全面発掘した。

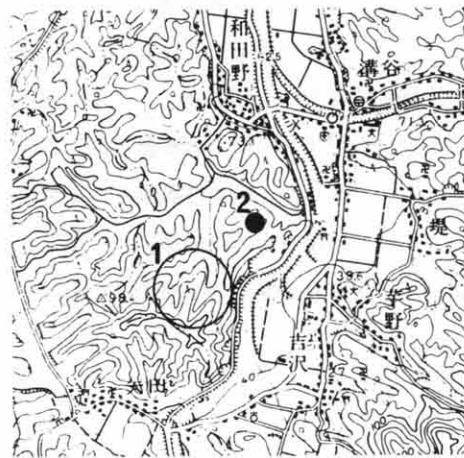
調査概要

大田南古墳群 今回の調査では群内にA～E、計5か所の古墳状隆起・平坦面を対象に試掘調査を行った。調査の結果、A～D地点については遺構・遺物の検出をみることができず、トレンチ壁の断面観察からも自然地形であることが判明した。

E地点は、丘陵最高所付近に位置する約4m×20m程度のいびつな平坦面である。表土直下で奈良時代後半の須恵器・土師器・鉄釘などが出土した。遺構は近年、伐採木の集積所として利用されていたためか、すでに削平されており、確認することはできなかった。

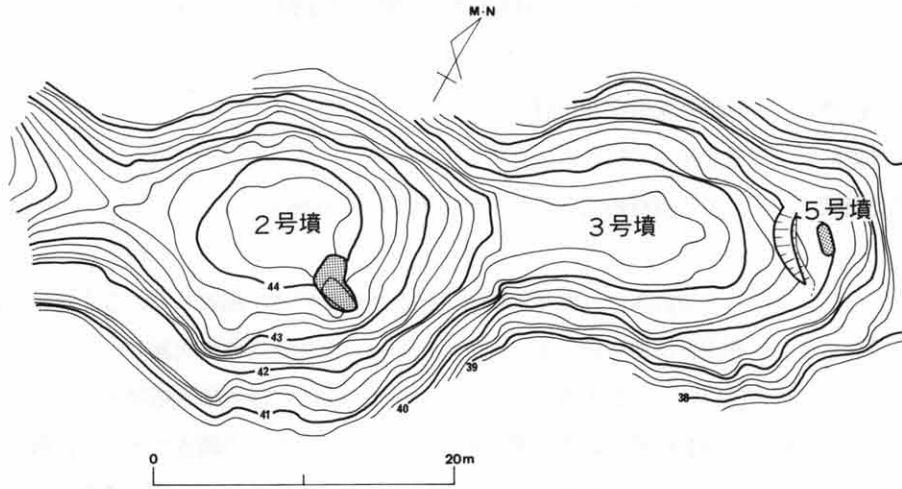
下後2号墳 最高所にある3号墳と5号墳の間に位置する。径約15mの円墳であったと推定されるが、後世の削平のため、墳形は判然としない。主体部・遺物などは検出されなかった。

下後3号墳 径約20mを測る円墳である。墳丘は自然隆起を利用して作られており裾部は明確ではない。2号墳側からの見かけの高さ3mを測る。主体部は墳頂部より東側斜面によったところで木棺直葬形態をとるもの1基を確認した。墓壇は3段に掘り込まれるものであるが、規模は削平や



第1図 調査地位置図(1/50,000)

1. 大田南古墳群 2. 下後古墳群



第2図 下後古墳群地形図

流出のため確定することはできなかった。遺物は墓壙の埋土上層より、土師器細片(壺?)が出土している。このような状況から3号墳は5世紀に築造されたものと考えられる。

下後5号墳 尾根先端に位置する1号墳の北側に位置する。一辺約5mを測る小型方形墳である。墳丘は丘陵斜面を「L」字状にカットし、西側に深さ約20cmの溝を設け区画する。埋葬施設として土壙墓1基を検出した。出土遺物は認められなかった。

まとめ 大田南古墳群では、顕著な遺構・遺物は確認されなかったものの、唯一遺物の出土をみたE地点は丘陵最高所付近、標高90m、平地との比高差約70mを測り、通常の遺跡の立地とは大きく様相を異にする。E地点では遺構を検出することができなかったが、今後このような立地をとる遺跡の存在に注意する必要がある。

下後古墳群で、今回調査した3基の古墳は、墳形については2・3号墳が円墳、5号墳が小型方形墳であった。埋葬施設は3号墳が木棺直葬、5号墳が土壙墓と各々様相を異にするものであった。昨年度調査した1号墳は円墳であるが、盛り土により墳丘を築成しており、同じ円墳でも地山成形により墳丘を造り出す2・3号墳とは異なるものである。今後、このような差異が何に原因するものか検討していく必要がある。

(石崎 善久)

7. 塚本古墳

所在地 船井郡八木町神吉和田塚本
 調査期間 平成2年5月25日～8月10日
 調査面積 約1,500m²

はじめに 今回の調査は、府営神吉地区ほ場整備事業に伴うもので、京都府農林水産部耕地課から依頼をうけて、当調査研究センターと京都府教育委員会が合同で実施した。

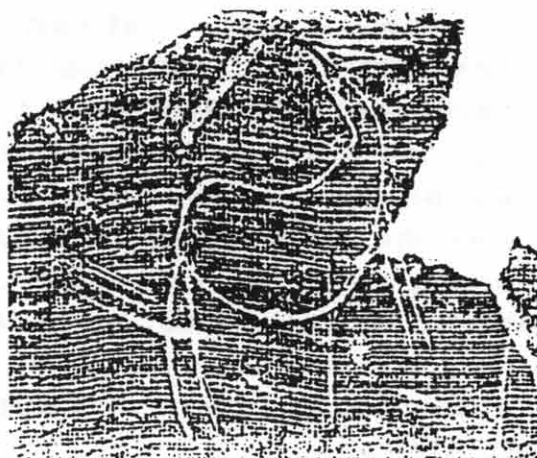
塚本古墳は、亀岡盆地東側山地内の、通称「神吉盆地」という小盆地に位置する。標高300m以上で、亀岡盆地との比高差は約200mである。古墳は、神吉盆地南側の山地から北にのびる丘陵の裾部にあり、緩やかな傾斜地に築造されている。調査前の状況は、段々状の水田の中に盛り上がる、長径約18m・短径約13.5mのいびつな楕円形状の小丘であった。高さは南側で約1m・北側で約2mであり、上部はほぼ水平な平坦地である。「昔、刀が出た。」等の、地元の伝承がある。現在は茶畑となっている。

調査概要 小丘部の調査では、多数の埴輪片が出土し、古墳であることは確認したが、埋葬主体部は、開墾等で削平されて残っていなかった。墳丘は、ほぼ基底部分から盛土して構築する。盛土は、中央部から外側にむかってなされ、少なくとも2回は整面している。

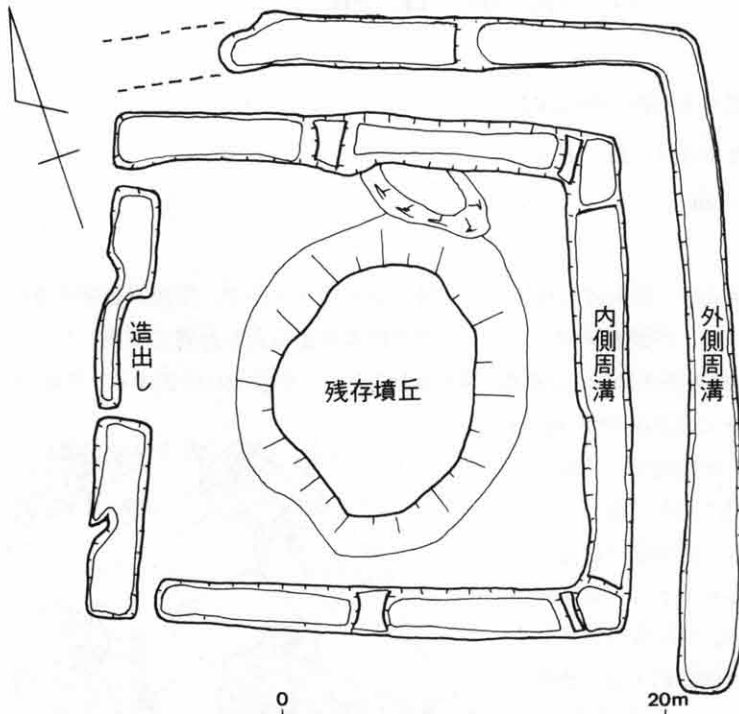
周辺部の調査では、一辺約28mの方形にめぐる溝を検出した。また、その外側から、方形溝の北・西辺に平行する、一辺約36mの「L」字形の溝を検出した。方形溝・「L」字形溝ともに、幅約2.5mである。「L」字形溝は、深さ10



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 円筒埴輪の線刻動物文



第3図 塚本古墳平面図

～30cmの浅いもので、もとは方形にめぐっていたものが、東・南側では削平されて残存していないものとも考えられる。以上のことから、塚本古墳は、二重の周溝をもつ方墳であることが判明した。内側周溝には、陸橋状になった部分が数か所にある。また、墳

丘東辺中央部には、造り出し状の突出部分がある。

出土遺物は円筒埴輪片がほとんどである。硬質のものが多く、外面ヨコハケ調整され、川西編年のⅣ期・5世紀後半頃に位置付けられる。円筒埴輪には、鹿らしい動物や記号状の線刻文があるものもみられる。その他、盾形埴輪片と考えられるものが数片出土した。また、内側周溝の北辺中央付近から、蓋形木製品の蓋部とみられる木製品が出土している。

まとめ 5世紀後半頃、この古墳がある南丹波地域では、亀岡盆地内に、全長約80mの前方後円墳である千歳車塚古墳が築造される。また、各所に一辺約30m前後の方墳が築造される。このような状況から、千歳車塚古墳が南丹波の最高首長墓であり、方墳が南丹波の最高首長に従属していた小地域の首長の墓ととらえられている。このように考えると、この塚本古墳も、南丹波の最高首長に従属し、神吉盆地周辺を支配していた地域首長の墓とみられる。この地域では、この時期の古墳について調査例が少なく不明な点が多いが、現時点では、一応以上のようにみることも可能と考えられる。

今回、このような古墳の存在を確認したことは、南丹波地域の古墳時代を考える上で、大きな意義がある。なお、執筆にあたり、京都府教育委員会技師森下衛氏から多くのご教示をいただいた。

(引原 茂治)

8. 八木嶋遺跡第2次

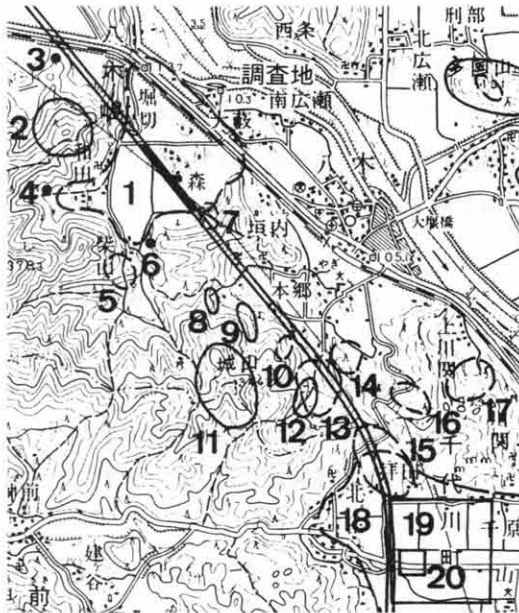
所在地 船井郡八木町八木嶋
調査期間 平成2年4月17日～平成3年2月末日(予定)
調査面積 約8,000m²

はじめに 八木嶋遺跡は、大堰川の西岸に位置し、西方から大堰川に流れ込む東所川の沖積作用により形成された扇状地上に立地する集落遺跡である。発掘調査は、国道9号バイパス(京都縦貫道)の建設に伴い、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した。

調査概要 今回の調査では、昨年度の試掘結果をふまえて、A～Eの5か所の地区設定を行い調査を実施した。現在も調査中のため、大まかに概要を述べておく。

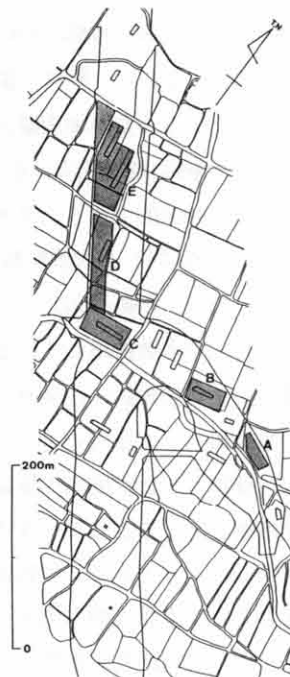
A地区では、鎌倉時代の土壇墓を3基確認した。B地区では、遺構面が二面あり、上層

では、鎌倉時代の溝、土坑、掘立柱建物跡などを確認した。下層では、奈良～平安時代に属する柱穴を多数



第1図 調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)

- | | | |
|--------------|------------|-----------|
| 1. 八木嶋遺跡 | 2. 八木城出城跡 | 3. 大鳥羽池古墳 |
| 4. 神田古墳 | 5. 坊田古墳群 | 6. 柴山古墳 |
| 7. 森古墳群 | 8. 堂山窯跡 | 9. 古谷窯跡 |
| 10. 西所古墳群 | 11. 八木城跡 | 12. 内山窯跡 |
| 13. 小谷古墳群 | 14. 内山古墳群 | 15. 拜田古墳群 |
| 16. 大法寺古墳群 | 17. 上川関古墳群 | 18. 千代川遺跡 |
| 19. 丹波国府跡推定地 | 20. 桑寺庵寺 | |



第2図 調査区配置図(1/8,000)



第3図 C地区遺物出土状況

検出し、現在6棟の掘立柱建物跡を確認している。柱の掘形は一辺40～50cmを測るものが多いが、70cm前後を測るものもある。C地区では、西南部において溝を確認した。岸辺にはしがらみ状遺構が設けられ、それに隣接して木器の未製品を多数検出した土坑などもある。木器には、堅杵、鋤、櫂、砧や不明木製品があり、これらとともに、6世紀後半を中心とする多量の須恵器・土師器が出土した。また、この地区から平安時代の墨書土器約30点や銅銭(延喜通宝、乾元大宝)なども出土している。墨書土器は、内外面に墨書されたものが特徴的であり、文字では「西」と記されたものが多く、10点前後を占める。D地区では、直径40～50cmを測る柱穴を検出したが、建物としてまとまって確認するには至っていない。E地区では、一辺70～80cm、大きいものでは約1mを測る隅丸方形の掘形をもつ柱穴を多数検出している。これまでのところ、11棟の建物跡を確認し、中でも一番規模の大きい建物跡は、東西3間×南北8間を測る。

まとめ いままでのところ、調査成果は、2点に要約することができる。一つは、C地区で確認された古墳時代後期の遺構・遺物であり、多数の木器の出土した土坑は未製品の集積場と考えることができよう。もう一つは、E地区を中心に大規模な掘立柱建物跡群を確認したことである。建物跡群の性格はこれからの課題であるが、やや離れるC地区ではまとまって墨書土器も出土しており、またE地区でも円面硯が2点見つかったことなどから、官衙的な建物群が存在した可能性が考えられる。多くは調査中のため、詳細は次の機会に報告する。

(鶴島 三寿)

9. 内里八丁遺跡

所在地	八幡市内里八丁
調査期間	平成2年4月12日～平成3年3月末日(予定)
調査面積	約5,000m ²

はじめに 今回の発掘調査は、第二京阪道路建設に伴う事前調査であり、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施したものである。

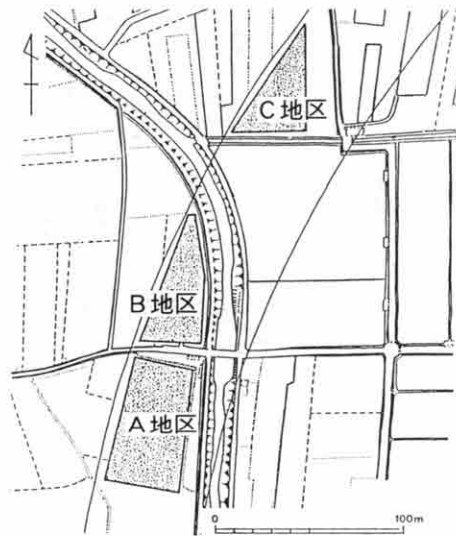
内里八丁遺跡は、昭和63年に試掘調査を開始し、平成元年度から遺跡南部のA地区で面的な調査を実施してきている。これまでの調査の結果、内里八丁遺跡は木津川の氾濫原に存在した自然堤防上に営まれた集落跡であり、弥生時代後期から飛鳥・奈良時代(一部に鎌倉時代を含む)にかけて少なくとも3面の遺構面の存在が明らかとなった。

今回、第1遺構面(飛鳥・奈良時代)と第2遺構面(弥生時代末～古墳時代前期)の調査を終了したことから、検出遺構を中心にその概要を説明する。

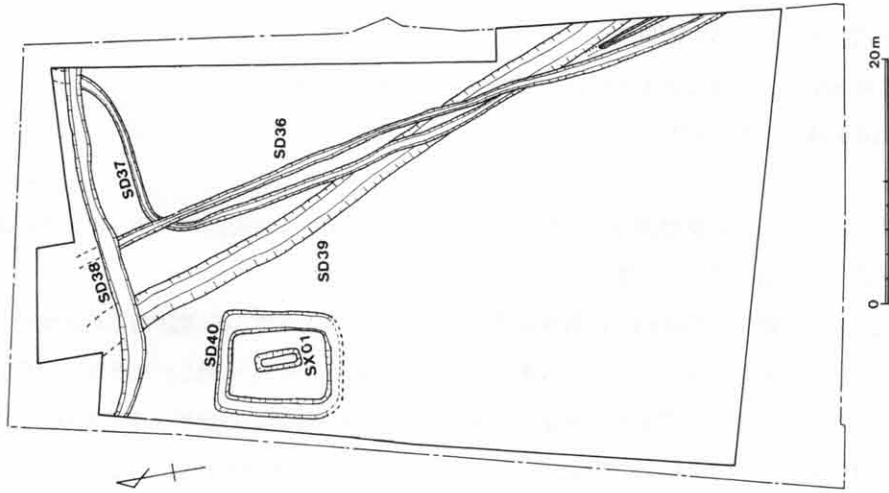
調査概要 第1遺構面は、地表下約70cm付近に広がる黄茶色系の粘質土層をベースとする。検出した遺構は、竪穴式住居跡1基、掘立柱建物跡5棟、溝・土坑等がある。調査地西北部では竪穴式住居跡(SH01)を検出した。長辺約4.6m・短辺約3.8m方形の住居跡である。住居の東北コーナーに造り付けのカマドを持ち、焚き口付近から土師器の長胴甕



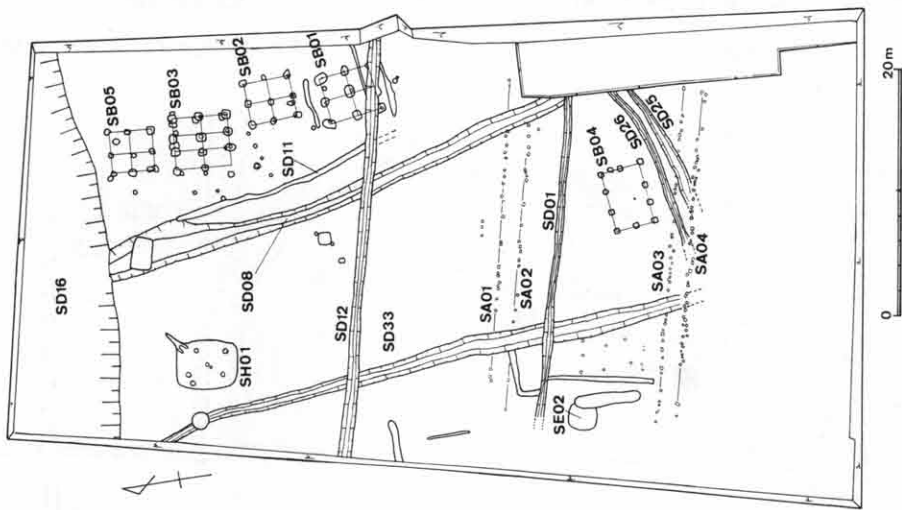
第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 調査区配置図



第3図 A地区第1遺構面平面図



第4図 A地区第2遺構面平面図

が出土している。掘立柱建物跡は、調査地東北部で倉庫跡と見られる4棟(SB01～03・05)の総柱建物跡を検出した。また、南部でも2間×3間の建物跡1棟(SB04)を検出した。このSB04の西約12mには方形の井戸跡(SE02)が存在する。調査地中央付近を南北方向に流れる溝SD08は集落内を区画する溝と考えられ、東に倉庫群、西に住居域が設定されていたと見られる。これらの遺構は、出土した遺物の年代観からみて、ほぼ7世紀代に収まるものであった。ここで検出した遺構のうち柵列(SA01～04)・溝(SD01・12)は鎌倉時代に属する遺構であった。

第2遺構面は、第1遺構面から約30cm下がった黄灰色砂質土層をベースとする。検出した遺構は、方形周溝墓1基と同埋葬主体部・溝等である。方形周溝墓は調査地北西部で検出した。溝SD40によって区画された墓域は、長辺約7.8m×短辺約5.5mの規模を測る。墓域の中央やや東で、主軸を真南北方向に取る埋葬主体部(SX01)1基を検出した。埋葬主体部SX01は木棺直葬墓であり、全長約3.7m×幅約1.4mの掘形を持つ。掘形内部の木棺痕跡から、全長約3.0m×幅約0.6mの箱形の木棺が使用されたと見られる。埋葬主体部内から遺物の出土は見られないが、周溝内からミニチュア甕・高杯等、畿内第V様式に属する土器が出土した。方形周溝墓の東には南北方向にのびる溝(SD39)が存在する。溝幅は約2.2m、深さ約0.9mの規模を測る。溝の下層から庄内並行期、上層からは布留並行期の土器が出土している。調査地南部では遺構は検出されず、遺物包含層中から祭祀に関連する遺物とみられる鶏形土製品が出土している。

まとめ 現在までの調査の結果、下層の第2遺構面では集落と墓域を区画する溝SD39を検出した。おそらく弥生時代末から古墳時代前期には溝から西が墓域、東に集落が営まれていたと推定される。その後の飛鳥・奈良時代の段階では溝SD39とほぼ同一場所に溝SD08が存在する。この溝の西部にはSH01・SB04等の住居跡が存在することから、同時期における西部方面への集落の拡大状況が判明した。

2時期の遺構面で検出した多くの溝跡は、その主軸をほぼ南北方向に取っている。これは調査地の西側に旧河道の痕跡が存在するところから、旧河道・自然堤防等による制約を受けたものと判断する。

今後、A地区最下層の調査、遺跡の中心と思われるB・C地区の調査を予定している。内里八丁遺跡に関しては、今後の調査成果に期待されるところであり、詳細は後の報告に譲りたい。

(竹原 一彦)

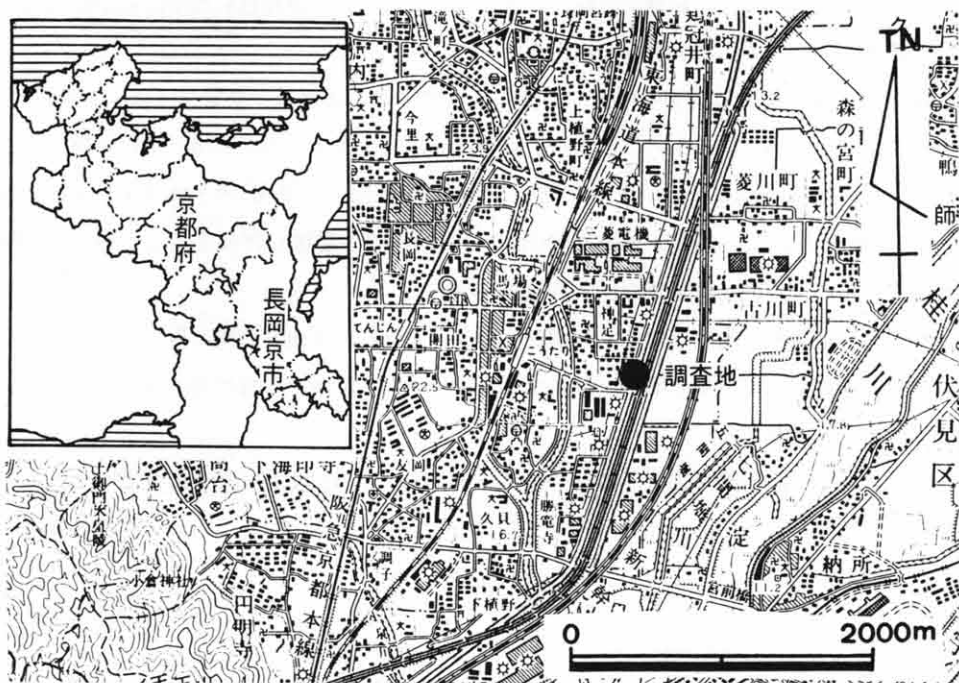
資 料 紹 介

長岡京跡左京第216次調査の古墳時代遺物の紹介(1)

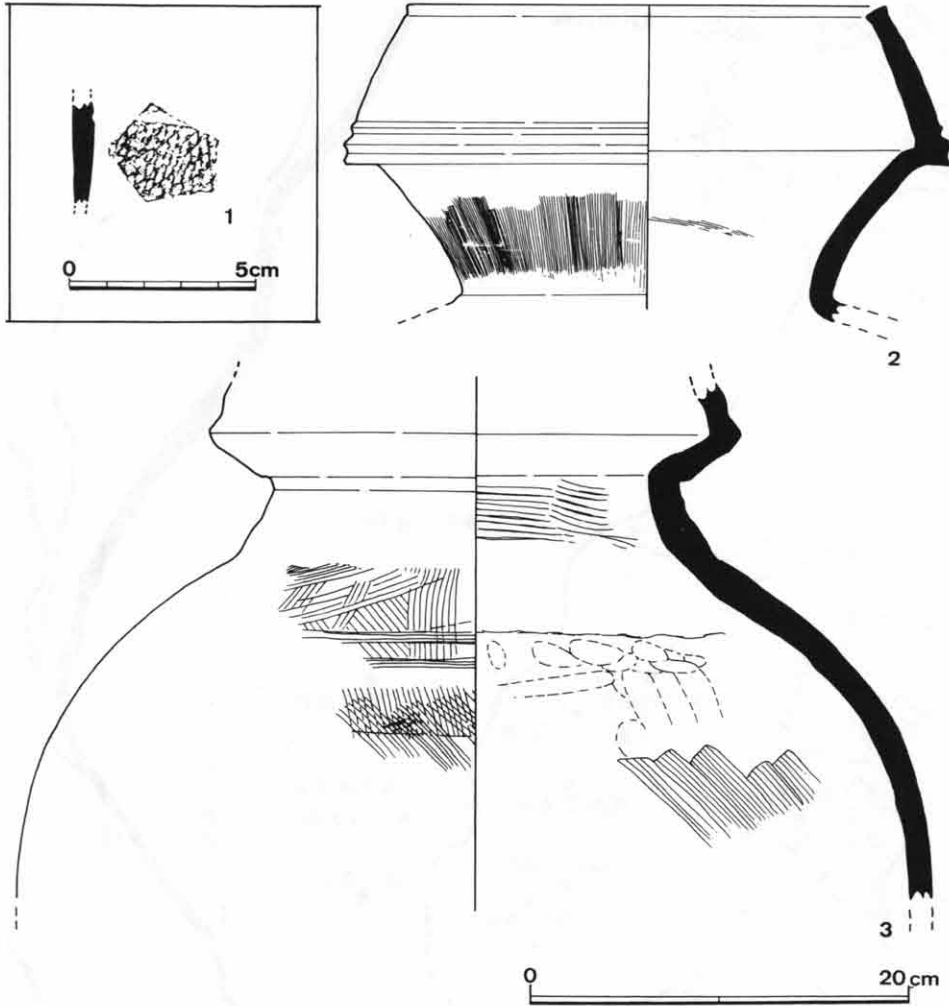
中 川 和 哉

長岡京跡左京第216次調査は、名神高速道路の拡幅工事に伴う発掘調査である。上下1車線ずつの拡幅のため、トレンチ幅は5～6mと狭かった。そのため全ぼうを明らかにできた遺構は少なかった。しかし、道路が等高線にほぼ並行に走ることから、トレンチ内を横切る東西方向の流路及び溝を多く検出できた。今回資料紹介する遺物もやはり、トレンチを横切り西から東に流れる古墳時代の自然流路であるSD21649から出土したものである。

SD21649は長岡京の五条大路及び、東二坊第一小路を検出する目的で設定した第10トレンチの下層で検出した自然流路で、検出長は約4.5m・幅約10.8m、検出面からの深さ約1.2mを測る。埋土は礫・砂・シルトの互層をなし、ラミナ状の構造を示していた。流路



第1図 調査地位置図

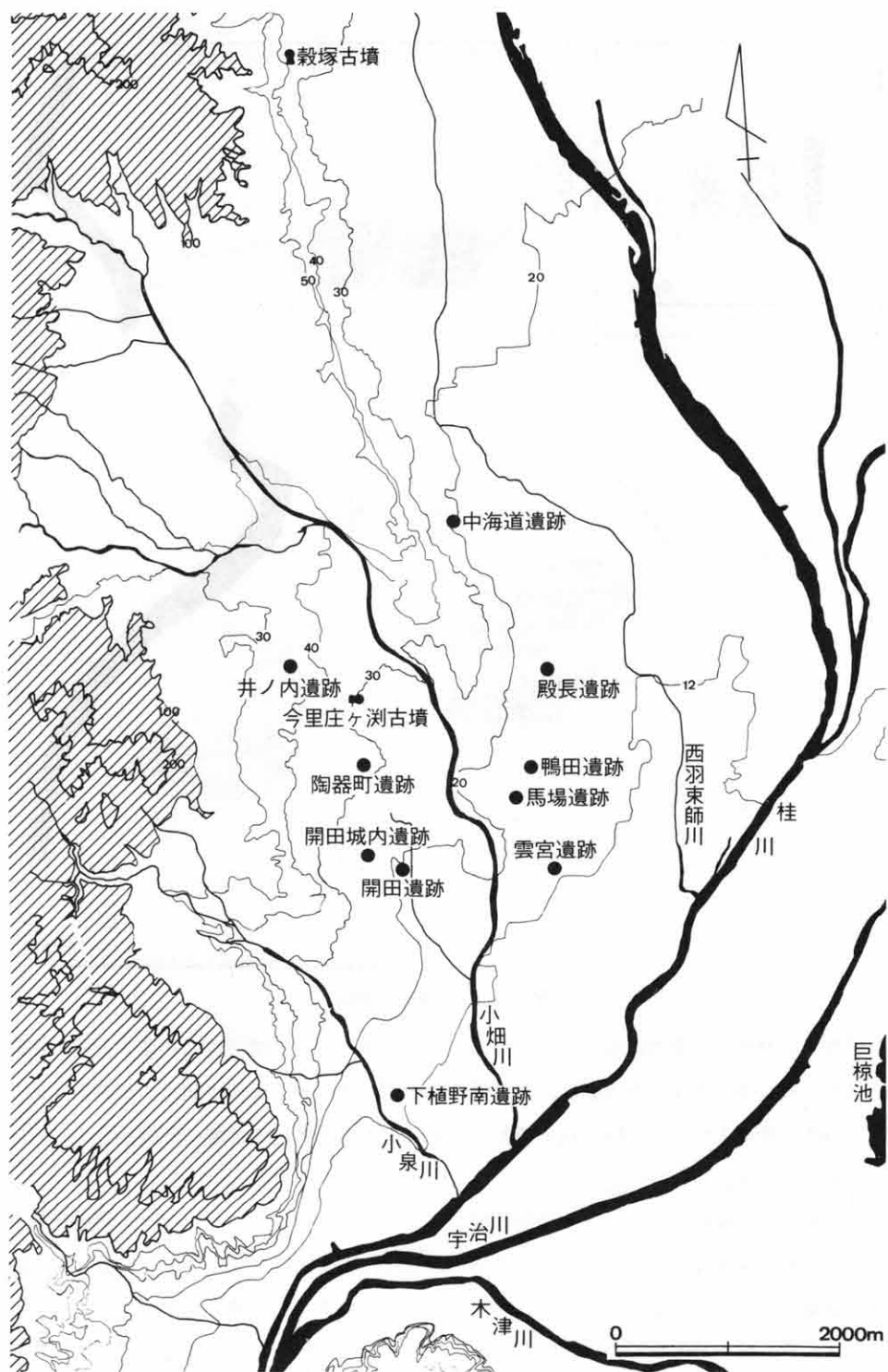


第2図 出土遺物実測図

の最深部は有機質の遺物に富んでいた。出土土器の多くは、古墳時代の布留式土器の範疇に入る。最も多く出土した土器は、口縁端部が内面に比厚し、頸部に強くナデ調整を施した、布留式甕であった。今回は出土遺物のうち韓式土器と瀬戸内地域の影響が認められる土器を紹介する。

1は表面に凹線をめぐらし、その間に縄蓆文を施し、外面にていねいなナデ調整を施した、土師質の韓式土器である。胎土は微細で砂粒をほとんど含まず、焼成は良好で、色調は淡茶褐色を呈する。器壁が薄いことから小型の平底鉢あるいは壺と想定できる。

2は二重口縁を持つ大型の壺である。口縁部は幅広く内傾し、口縁端部は内外面に肥厚し平坦な端面を持つ。擬口縁部には三本の凸帯が見られる。内外面の調整はおおむねナデ



第3図 桂川西岸の韓式土器出土分布図

であるが、頸部外面には縦方向のハケ、内面にもハケが認められる。胎土には径3mmの砂粒を少量含む。焼成は良好である。色調は淡茶褐色を呈する。

3もまた内傾する口縁部をもつ大型の二重口縁の壺である。壺の体部外面には荒いハケ調整が見られ、体部内面の下半部には木製工具によるイタナデ様の整形、上半部には指ナデ、指押えが施され、接合痕も認められる。頸部内面には荒いハケ調整が施される。また内面には漆状の黒色の付着物が残存する。胎土には径6mmの砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は暗茶褐色を呈し、共伴した他の土器と異なる。他に今回の発掘調査で設定した雲宮遺跡内の第9トレンチの自然流路SR21634からも、瀬戸内の影響を受けた二重口縁壺が1個体出土している。また、瀬戸内地域の影響を受けた二重口縁の壺は、鴨田遺跡からまとまって出土している。

韓式土器は淀川上流の桂川西岸地域では、12の遺跡及び古墳から出土している。このうち土師質のものは中海道遺跡・鴨田遺跡(以上向日市)、今里庄ヶ渕古墳・陶器町遺跡・馬場遺跡(以上長岡京市)、下植野南遺跡(大山崎町)から出土している。山城地域では、桂川西岸に韓式土器が集中して出土している。また、韓式土器が出土した遺跡内では、初期須恵器が出土しており、いち早く須恵器を手に入れることのできる人々が居住していたと考えられる。この地域が土師氏の居住地であることや、秦氏の造ったとされる葛野大堰によって灌漑されたと想定できることなどから、具体的なことも解釈し得るが、ここでは調査例の増加を待って、将来の課題としておきたい。

(なかがわ・かずや=当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1 『向日市埋蔵文化財調査報告書—鴨田遺跡—』第14集 向日市教育委員会 1985

注2 國下多美樹他「中海道遺跡(第2・3・4・6次)発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第13集 向日市教育委員会) 1984

注3 高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』京都府教育委員会) 1980

注4 小田桐淳「右京第140次(7ANIKE-2地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和58年度 勸長岡京市埋蔵文化財センター) 1984

注5 山本輝雄「長岡京跡左京第108次(7ANLHK-2地区)調査概要」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集 勸長岡京市埋蔵文化財センター) 1985

府下遺跡紹介

49. 蟹 満 寺

蟹満寺は、京都府相楽郡山城町大字綺田にある真言宗智山派の寺院で、蟹の恩返し伝説で著名である。立地する場所は、天神川南岸東部山地の西裾部にあつて、古くから普門山と号しているように、観音信仰と関係する。寺院の本尊は聖観音像であるが、現在では光明山寺にあったと寺伝でいわれている丈六釈迦如来坐像のほうがよく知られている。

この蟹満寺には、蟹の恩返しにまつわる縁起があり、『今昔物語』・『元亨釈書』・『古今著聞集』などに記載されている。それによれば、観音を信仰していた娘が食べられようとしていた蟹を助けたことがもとになっている。あるとき、蛇に吞まれようとしていたカエルを助けるため、蛇に妻になる約束をしたことから、蛇に求婚されたが、蟹が蛇をはさみで殺して娘に恩返しするという設定になっている。これまでの研究で、この物語のモチーフはすでに9世紀初頭に成立した『日本霊異記』に収められており、元来は蟹満寺の成立とは何の関係もないことが明らかにされている。

黒沢幸三氏の研究では、このような9世紀の『日本霊異記』の物語が、11世紀に完成した『法華験記』に取り入れられ、物語としてはほぼここで完成されているという。その後、この物語が12世紀に成立した『今昔物語』や14世紀に完成した『元亨釈書』に入り、蟹満寺縁起として完成したといわれている。実際に、物語が語っている場所も、山城国紀伊郡

(『日本霊異記』)→山城国久世郡=蟹満多寺(『法華験記』)→山城国相楽郡=紙幡寺(『今昔物語』・『元亨釈書』)と、次第に南へと移っていったことがわかる。また、『今昔物語』には「紙幡寺」と称する寺院のこととして出現するので、11世紀には現在の蟹満寺に相当する寺院の存在したことがわかる。

以上の黒沢氏の国文学による研究によって、蟹満寺がもと紙幡寺と呼ばれていたこと、『法華験記』が縁起の元となり、「蟹満多寺」という名称が生み出され、それが紙



第1図 遺跡所在地(1/50,000)

幡寺と付会されて蟹満寺縁起が生まれたことが明らかとなったのである。

このように、縁起が開基を示すものでない以上、紙幡寺の名称と、白鳳期の丈六釈迦如来坐像、近年の発掘調査の成果などを手がかりにして、開基の時期等について考えなければならぬ。

まず、国文学の方面では、先に述べたように、黒沢氏が蟹満寺縁起が史実を伝えたものでないことを明らかにされたため、紙幡寺の「カミハタ」の語源を考える方法をとった。それによれば、「カミハタ」は「カムハタ」・「カニハタ」のことで、高句麗系渡来人である狛人が機織・染色に従事したこと由来するとされた。さらに、高麗寺の存在から丈六釈迦如来坐像が白鳳からこの寺にあったと推定し、原蟹満寺というべき寺院が白鳳時代から存在したと考えられた。

また、仏像を中心とする考察については、角田文衛氏が1936年に、この丈六釈迦如来坐像がもと高麗寺にあって、それが10世紀頃に光明山寺へ移るが、光明山寺が廃絶すると、光明山寺の懺悔堂であった蟹満寺に移ったと発表されて以来、論争がまきおこった。まず、田中重久氏は、縁起と蟹満寺の創立が無関係であることを指摘した。そのうえで、広隆寺の『末寺別院記』「薬上寺」の別名として「蟹幡寺」の名が見えるので、平安時代以降広隆寺の末寺になっていたことから、秦氏の寺院として白鳳時代に建立されたと推定された。その後、1944年に足立康氏は、遺稿の中で、仏像はもと井手寺の本尊であったことを述べている。戦後になって、杉山二郎氏が山城国分寺旧仏説を唱えられたりしているが、近年にいたるまで、これらの説がそのままの状況になっていた。

1990年5月になると、蟹満寺境内の発掘調査が実施されるに及んで、注目すべき成果が得られた。調査地は、現在の本堂の西側で、そこで二重に瓦が積まれた重成式の瓦積基壇と礎石の根石などが検出された。この基壇は、位置などから考えて金堂の基壇であるらしく、その規模は、南北17.8m(60尺)×東西28.5m(96尺)と推定され、その上に梁行4間(40尺)×桁行7間(80尺)の礎石建物があつたと復原されている。この建物は、1尺=29.7cmの天平尺を用いて造られており、また出土した瓦からほぼ7世紀後半頃に創建されたことが判明したのである。

この調査結果を受けて、現在、丈六釈迦如来坐像が7世紀後半の創建当初から蟹満寺にあつたこと、基壇の規模が地方寺院としてはこの時期最大であること、伽藍配置としては薬師寺式をとること、などが推定されるようになった。しかし、残された問題点も多く存在することも事実である。

まず、丈六釈迦如来坐像が7世紀後半の創建当初から蟹満寺にあつたとすれば、なぜ平安時代創建の光明山寺から移したとする寺伝が生じたのか、また、現本尊との関係はどう

なるのか、第二に寺院の造営主体として秦氏を考えるのか、第三に平安時代以降に出てくる広隆寺末寺の薬上寺＝蟹幡寺と、光明山寺懺悔堂としての蟹満寺との関係、さらに発掘調査で見つかった原蟹満寺との関係、といった種々の問題が新たに生じてきたことも事実である。

今後、これらの問題については、各種の史料だけでなく、発掘調査で出土した瓦などの考古資料の分布、仏像などの美術資料をもとにして解明していかなければならない。特に、考古資料については今後増加が見込めるので、期待したい。

(土橋 誠)

〈参考文献〉

- 岩井武俊「蟹満寺及廃光明山寺につきて」『考古界』5-9 1907
角田文衛「廃光明山寺の研究」『考古学論叢』1 1936
田中重久「平安奠都前の寺址と其出土瓦に就いて」『夢殿論誌』18 1938
「日本靈異記に見ゆる寺院址の研究」『史迹と美術』180・181・182 1947
足立 康「蟹満寺釈迦像の伝来に就いて」(同『日本彫刻史の研究』所収) 1944
杉山二郎「蟹満寺本尊考—造仏所研究のうち(一)—」『美術史』41 1960
黒沢幸三「蟹満寺縁起の源流とその成立—民話の伝説化—」『国語と国文学』45-9 1968
『山城町史』 山城町 1989
『蟹満寺—山城町内遺跡発掘調査現地説明会資料』 山城町教育委員会 1990

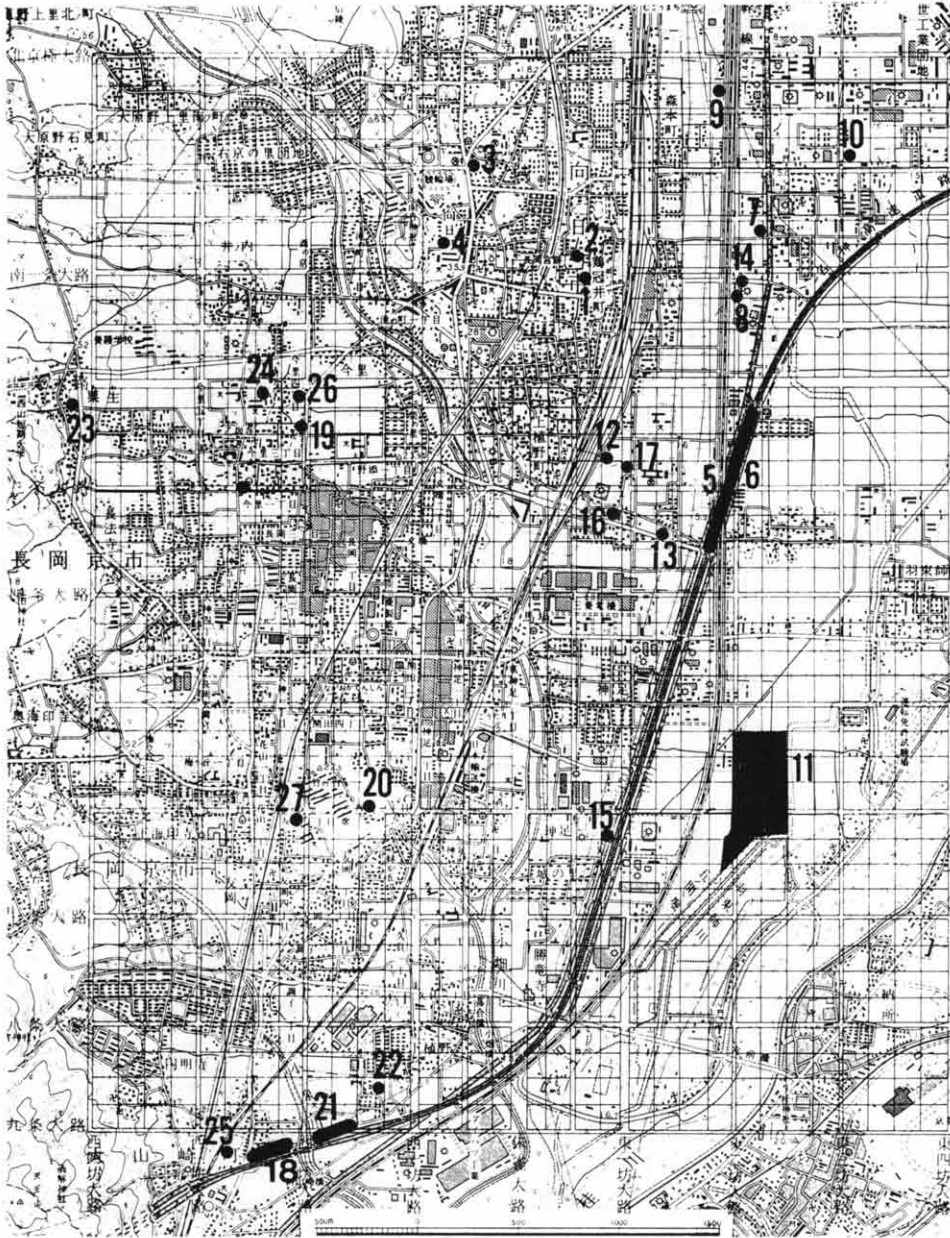
長岡京跡調査だより・35

平成2年8月22日・9月26日・10月24日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮域4件、左京域13件、右京域10件の計27件であった。これら27件の調査地は、位置図・一覧表のとおりである。このうち、主なものいくつかについて、調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1990年10月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内245次	7AN4G	向日市鶏冠井町東井戸47・49-1	(財)向日市埋文	7/2～7/31
2	宮内246次	7AN9W	向日市鶏冠井町御屋敷27-1	(財)向日市埋文	7/17～7/28
3	宮内247次	7AN12J	向日市寺戸町西野辺13-14	(財)向日市埋文	9/4～9/14
4	宮内248次	7AN18E	向日市向日町北山18-5	(財)向日市埋文	10/1～
5	左京241次	7ANXYT 7ANXKM	京都市伏見区羽東師菱川町山巖手・小角	(財)京都府埋文	4/9～
6	左京242次	7ANFSK-3 他	向日市上植野町尻引・南淀井・脇田	(財)京都府埋文	4/9～
7	左京244次	7ANDTK-2	向日市森本町高田17	(財)向日市埋文	6/20～
8	左京248次	7ANEIS-3	向日市鶏冠井町石橋12-2・13他	(財)向日市埋文	6/11～9/26
9	左京249次	7ANDSD	向日市森本町下町田26	(財)向日市埋文	6/25～7/25
10	左京250次	7ANVRZ-2	京都市南区久世大蔵町	(財)京都市埋文	6/25～8/11
11	左京251次	7ANYTH-2	京都市伏見区淀水垂町	(財)京都市埋文	7/9～
12	左京252次	7ANFKE-2	向日市上植野町車返し・池尻	(財)京都府埋文	8/5～
13	左京253次	7ANFKW-5	向日市上植野町桑原16	(財)向日市埋文	9/3～
14	左京254次	7ANEHD-3	向日市鶏冠井町七反田14-1	(財)向日市埋文	10/11～
15	左京255次	7ANMOT-3	長岡京市神足太田30	(財)長岡京市埋文	9/20～
16	左京256次	7ANFOR-2	向日市上植野町落堀1	(財)向日市埋文	9/17～10/4
17	左京257次	7ANFKE-3	向日市上植野町車返し8	(財)向日市埋文	10/1～
18	右京349次	7ANSDD-4	大山崎町円明寺井尻他	(財)京都府埋文	4/9～
19	右京352次	7ANITT-12	長岡京市今里四丁目5	(財)長岡京市埋文	5/15～8/31
20	右京356次	7ANISY-9	長岡京市今里二丁目112	(財)長岡京市埋文	7/6～8/31
21	右京357次	7ANSID 他	大山崎町円明寺壺町田他	(財)京都府埋文	7/2～
22	右京358次	7ANTTD-2	大山崎町下植野小字寺門11	大山崎町教委	7/25～8/13
23	右京359次	7ANHKI	長岡京市粟生北開32他	(財)長岡京市埋文	8/6～
24	右京360次	7ANIAE-7	長岡京市今里四丁目254-1	長岡京市教委	8/27～
25	右京361次	7ANSCE	大山崎町円明寺小字茶屋前	大山崎町教委	8/20～
26	右京362次	7ANITT-14	長岡京市今里四丁目17-1	(財)長岡京市埋文	9/12～
27	右京363次	7ANNKN-5	長岡京市友岡一丁目	(財)京都府埋文	10/22～



▽番号は一覧表・本文()内と対応

調査地位置図

宮内第245次(1)

(財)向日市埋蔵文化財センター

内裏内郭南東隅及び内裏下層遺跡の調査である。長岡京期の厚さ1mを越える盛土造成があり、その上面で掘立柱建物を検出した。下層には、弥生後期～古墳時代の竪穴住居・溝・土坑などが広がっている。

左京第244次(7)

(財)向日市埋蔵文化財センター

左京南一条三坊七町及び高田遺跡の調査である。東三坊第一小路東側溝と掘立柱建物・掘立柱塀を検出した。建物は、大規模な南北棟2棟で、宅地の北西隅にあたり、中心建物は調査地の南東にあると予想される。大規模宅地の一画とみられる。下層でみつかった弥生時代の道は、発見例の稀なもので、幅員2.5m、両側溝を備えている。

左京第248次(8)

(財)向日市埋蔵文化財センター

東二坊大路、左京二条三坊一・二町及び鶏冠井遺跡の調査である。東二坊大路と二条第一小路の交差点を確認した。二条三坊一町では、西と南を塀で区画し、南西隅に脇門を設けること、二町では、掘立柱建物・塀・溝などの2時期の変遷が明らかになった。一町は、第82次調査で車持氏の邸宅と判明している。鶏冠井遺跡関係では、旧流路からみつかった縄文時代の石棒が注目される。

左京第251次(11)

(財)京都市埋蔵文化財研究所

東二坊大路、左京七条三坊一・二町の調査である。東二坊大路と六条大路の交差点を確認した。六条大路は、大路であるが、道路幅員は小路規模(10m)である。自然流路が交差点を斜めに横切っており、東三坊大路中央に、桁行2間(5.4m)、梁間2間(5m)の橋を架けている。河川からは、人面墨書土器・ミニチュアかまど・土馬・人形・獣骨などの祭祀遺物が多量にみついている。これらの遺構・遺物が発見されたのは、海拔8.5mという低いところであり、これまでの長岡京の調査の常識を破るものとして、大きな意味をもつ。下層には、古墳時代の水田遺構が広がっており、現在調査中である。

左京第252次(12)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

東一坊第二小路、左京三条一坊十二町の調査である。掘立柱建

右京第349次(18)

物・溝・土坑などを検出、遺物には凝灰岩・瓦・緑釉陶器などがある。瓦は、すべて平安京の同範瓦であり、建物などは長岡廃都後、平安時代の国家関係機関にかかわるものとみられる。長岡京の遺構は、さらに下層か。現在調査中。

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

九条大路隣接地(京外)及び百々遺跡の調査である。奈良～平安時代の掘立柱建物・溝・土坑や中世の土壇墓など多数検出。調査地の西端を斜行する溝は、平安時代の西国街道の東側溝とみられる。長岡京関係遺構は未確認。

(平良 泰久)

京都府埋蔵文化財調査研究センター10周年 記念特別展「京都・古代との出会い」について

平 良 泰 久

京都府埋蔵文化財調査研究センターは、本年に設立10周年を迎え、その記念事業の一つとして、特別展を開催した。その概要は次のとおりである。

1. 開催期間

1990年8月8日～同年9月2日(開館日25日間)

2. 会場

京都文化博物館 4階特別展示室(床面積844m²)

3. 主催

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都府教育委員会

財団法人京都府京都文化財団

4. 後援

京都府・京都市・京都市教育委員会・京都市町村教育委員会連合会・京都新聞社
・NHK 京都放送局・KBS 京都

5. 開催趣旨

京都府埋蔵文化財調査研究センターが1981年に設立されて以降の10年間に、京都府では、湯舟坂2号墳(久美浜町)、芝ヶ原古墳(城陽市)、広峯15号墳(福知山市)、私市円山古墳(綾部市)、恭仁宮朝堂院南門跡(加茂町)、上人ヶ平遺跡(木津町)、平安宮豊楽殿跡(京都市)、遠所製鉄遺跡(弥栄町)など、多くの重要な遺跡・遺物が発見された。

そこで、これらを中心として、この10年間において京都府各地で発見された遺物の数々や、発掘の成果を一堂に集めて、広く府民に公開し、埋蔵文化財に対する理解を深めることを目的とする。

6. 展示構成

最近10年間の発掘資料を中心に、12のテーマを選定、テーマごとのコーナー展示とする。展示は、一般の見学者に親しみやすくわかりやすいものを目指した。そのため、

次の点に留意した。

- ①現代と対比して資料を見ること。
- ②解説には、できるだけ専門用語を避け、わかりやすくすること。
- ③全容の判明した重要な遺跡は、当時の様子の復原図を示すこと。
- ④できるだけ露出展示を多くすること。

各コーナーのポイントは次の通りである。

〈京都のひと〉縄文時代の土偶や古墳時代の人物埴輪、江戸時代の伏見人形などから、京都人の歴史をたどる。

〈王と民〉墳墓とその副葬品から、王のきらびやかな姿を示し、多くの民衆との違いを浮かびあがらせる。

〈文字〉漢字や仮名、ローマ字など、発掘された京都ならではの文字資料から、文字の役割を考える。

〈都〉京都府にある恭仁京、長岡京、平安京の三つの都の最新の発掘成果を示す。

〈つくる〉土器、埴輪、瓦などの窯業生産の遺跡や製鉄・铸造遺跡など、最新の成果を紹介し、古代のすぐれた技術を再発見する。

〈戦い〉京都はたびたび戦乱の舞台となった。弥生時代の環濠集落から江戸時代の戦乱の跡まで、防御施設や武器、武具の変化をたどる。



〈遊び〉京都の遺跡からは、遊びの道具が多く出土している。それらをとおして、現代に続く遊びの歴史をたどる。

〈音〉遺跡から出土する音を出す道具「楽器」を集め、古代の音色に心をはせる。

〈花〉花はいつからくらしの中にはいつてきたのか。遺物に表現されたさまざまな花をさぐる。

〈うつわ〉時代や用途、材質、さらには使う人の身分の違いなどによるうつわの変化をたどる。

〈住まい〉時代、身分、都市と農村などによる住まいの変化を、いまの住宅と対比しながらしめす。

〈調査研究10年〉当センターの発掘調査のあゆみを写真パネル展示でたどる。

〈ビデオ〉「私市円山古墳の発掘」（8分）「遠所遺跡の土層はぎとりパネルの作成」（4分）「丸塚古墳の家形埴輪の復元」（4分）

〈古代とのふれあい〉発掘で出土した完全な形の土器や瓦を直接手にふれ、古代の生活を実感する。また、用途不明の遺物を並べ、何に使ったものかを考える。

7. 関連印刷物

ポスター 『京都府埋蔵文化財調査研究センター10周年記念特別展 京都・古代との出会い』 B2判 カラー 1ページ 事前送付

リーフレット 『京都府埋蔵文化財調査研究センター10周年記念特別展 京都・古代との出会い』 B5判 カラー 1ページ 事前送付

図録 『京都・古代との出会い—京都府埋蔵文化財調査研究センター10周年記念特別展図録—』 B5判 カラー・白黒 96ページ 展示中販売

展示品目録 B5判 白黒 8ページ 展示中配布

絵はがき カラー 8枚 記念品贈呈

しおり カラー 8枚 記念品贈呈

8. 関連催し物

テープ・カット 1990年8月8日9時45分～10時 京都文化博物館4階 出席者39名

第57回研修会 「京都府の発掘10年の成果について」 1990年8月18日13時30分～16時30分 京都文化博物館3階映像ホール 参加者約180名

9. 展示資料

遺物等実物資料	パネ ル			
	写真	図	文字	計
731	183	10	16	209

10. アンケート結果

会期中、本展覧会についてアンケートを実施した。総入場者8,119名のうち4,536名の回答を得た。それらのうち、展示に関する主な意見は次のとおりである。

最も関心が高かったのは〈古代とのふれあい〉である。破片ではなく、完形品を手にとってみて、思っていた以上に「重い」「かたい」ことを実感できたためだろう。埴輪などの露出展示が好評だったことと合わせて、普通なら、「ケース越し」の遺物がぐっと身近に感じられたのだろう。

遺跡の復原図や写真パネルを多用したことや、発掘や遺物の復原のビデオも、わかりやすいと好評だった。

「コーナー展示」と「平易な解説」については意見がわかれた。「コーナー展示」は、「新しい試み」「親しみやすい」「わかりやすい」などの積極的な評価がある一方、「系統性がない」とか、「時代順」「地域別」「遺跡別」の展示がよいとの意見も少なくない。「平易な解説」も積極的な評価とともに、「専門用語」や「詳しい解説」が必要との意見がある。専門家・考古ファンからまったくの素人まで、見学者のニーズが多様であり、展示の方法がいかにもむずかしいかをよく示している。

(たいら・やすひさ＝当センター調査第1課資料係長)

センターの動向（2. 8～10）

1. できごと

8. 4 下後・太田古墳群(弥栄町)発掘調査開始
- 6 天若遺跡(日吉町)発掘調査開始
- 6 長岡京跡左京第252次(向日市)発掘調査開始
- 7 平安京跡(京都市)発掘調査開始
- 8 京都府埋蔵文化財調査研究センター10周年記念特別展「京都・古代との出会い」オープン(別掲)
- 9 塚本古墳(八木町)現地説明会
- 10 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック技術担当者会議(於：京都文化博物館)出席(松阪事務局長・安藤課長・安田係長・平良係長・奥村係長・水谷係長・辻本係長・小山係長)
- 16 左坂古墳群(大宮町)発掘調査開始
- 18 第57回研修会(別掲)
- 22 関係役員協議会(於：京都文化博物館)出席(福山敏男理事長，松阪寛支常務理事，中沢圭二，川上 貢，上田正昭，藤井 学，足利健亮，佐原真，藤田价浩の各理事)
- 22 長岡京連絡協議会
- 24 瓦谷古墳(木津町)現地説明会
- 26 シンポジウム「丹後と古代製鉄」(弥栄町)講演(増田主任調査員)
- 28 都出比呂志理事，長岡京跡視察
- 28 松阪局長北部発掘調査視察
9. 2 10周年記念特別展終了
- 11 足利健亮理事，遠所遺跡(弥栄町)視察
- 17 蒲生遺跡(丹波町)発掘調査開始
- 19～20 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研究会(於：福島県会津若松市)出席(安藤課長，安田係長，田中調査員)
- 9.22 山城郷土資料館施設開放講座(山城町)講演(石井主任調査員)
- 27 八木嶋遺跡(八木町)関係者説明会
- 29 内和田古墳群(加悦町)現地説明会
10. 1 田中西遺跡(舞鶴市)発掘調査開始
- 4 内里八丁遺跡(八幡市)関係者説明会
- 5 都出比呂志理事，内和田古墳群指導
- 7 第58回研修会(別掲)
- 9 松阪局長南部発掘調査視察
- 16 職員定期検診
- 21 滋賀県文化財保護協会，遠所遺跡視察
- 22 長岡京跡右京第363次(長岡京市)発掘調査開始
- 24 長岡京連絡協議会
- 26 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：和歌山県和歌山市)出席(安田係長，上田主事，木村主事)
- 26 長岡京連絡協議会
- 28 日本地理学会，桑飼上遺跡(舞鶴市)

見学

29 八後遺跡(木津町)発掘調査開始

30 コンピューター検討委員会

2. 普及啓発事業

8. 8～9. 2 京都府埋蔵文化財調査研究センター10周年記念特別展「京都・古代との出会い」(於：京都文化博物館)

8.18 第57回研修会開催(於：京都文化博物館)京都府の発掘10年の成果について—講演：安藤信策「京都府の発掘10年」—展示解説：奥村清一郎「10周年記念展示」

10. 7 第58回研修会開催—バスによる現地研修：彦根城と銅鐸の里をたずねて—現地講師：平良係長，奥村係長
(安藤 信策)

府下報告書等刊行状況一覧(89.11~90.10)

発掘調査報告書関係

- 『埋蔵文化財発掘調査概報(1990)』 京都府教育委員会 1990. 3
- 『長岡京市文化財調査報告』第23冊 長岡京市教育委員会 1990. 3
- 『長岡京市文化財調査報告』第24冊 同上 1990. 3
- 『長岡京市文化財調査報告』第25冊 同上 1990. 3
- 『長岡京市文化財調査報告』第26冊 同上 1990. 3
- 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第7集 大山崎町教育委員会 1990. 3
- 『ヒル塚古墳発掘調査概報』八幡市教育委員会 1990. 3
- 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概要』第15集 宇治市教育委員会 1990. 3
- 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第20集 城陽市教育委員会 1990. 3
- 『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第11集 田辺町教育委員会 1989.12
- 『山城町埋蔵文化財調査報告書』第8集 山城町教育委員会 1990. 3
- 『綾部市文化財調査報告』第17集 綾部市教育委員会 1990. 3
- 『宮津市文化財調査報告』第18集 宮津市教育委員会 1990. 3
- 『宮津市文化財調査報告』第19集 同上 1990. 3
- 『網野町文化財調査報告』第6集 網野町教育委員会 1990. 3
- 『丹後町文化財調査報告』第5集 丹後町教育委員会 1990. 3
- 『丹後町文化財調査報告』第6集 同上 1990. 3
- 『久美浜町文化財調査報告』第11集 久美浜町教育委員会 1990. 3
- 『京都文化博物館調査研究報告』第5集 京都府京都文化博物館 1990. 3
- 『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第8冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1989.12
- 『中久世遺跡発掘調査概報 平成元年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1990. 3
- 『植物園北遺跡発掘調査概報 平成元年度』同上 1990. 3
- 『鳥羽離宮跡発掘調査概報 平成元年度』同上 1990. 3
- 『平安京跡発掘調査概報 平成元年度』同上 1990. 3
- 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』同上 1990. 3
- 『向日市埋蔵文化財調査報告書』第28集 (財)向日市埋蔵文化財センター 1990. 3
- 『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第5集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1990. 3
- 『同志社大学徳照館地点・新島会館地点の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会
1990. 3

『同志社大学文学部考古学調査報告』第6冊 同志社大学文学部考古学研究室 1990. 7

『同志社大学文学部考古学調査報告』第7冊 同上 1990. 3

『古代学研究所研究報告』第1輯 (財)古代学協會 1990. 1

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

「千代川遺跡第16次」(京埋セ現地説明会資料 No.90-01) 1990. 2. 2

「長岡京跡右京第335次」(同 No.90-02) 1990. 2. 3

「興戸遺跡」(同 No.90-03) 1990. 2.16

「遠所遺跡群」(同 No.90-04) 1990. 6. 2

「瓦谷古墳」(同 No.90-05) 1990. 8.24

「内和田古墳群」(同 No.90-06) 1990. 9.29

中間報告

「桑飼上遺跡」(京埋セ中間報告資料 No.90-01) 1990. 1.26

「中海道遺跡第17次」(同 No.90-02) 1990. 1.30

「長岡京跡左京第216次・右京第343次」(同 No.90-03) 1990. 2. 9

「里遺跡」(同 No.90-04) 1990. 2.21

「内里八丁遺跡」(同 No.90-05) 1990. 2.23

「山形古墓」(同 No.90-06) 1990. 6.12

「京大北部構内遺跡」(同 No.90-07) 1990. 6

「里遺跡」(同 No.90-08) 1990. 6.19

「長岡京跡左京第216次」(同 No.90-09) 1990. 6.19

「横浦古墓」(同 No.90-10) 1990. 7.20

「興戸遺跡」(同 No.90-11) 1990. 7.26

「八木嶋遺跡第2次」(同 No.90-12) 1990. 9.27

「内里八丁遺跡」(同 No.90-13) 1990.10. 4

府下現地説明会資料

「幾坂遺跡・左坂古墳群」 京都府教育委員会 1990. 9. 1

「長岡京跡右京第352次調査(今里車塚古墳7次調査)」 長岡京市教育委員会 1990. 8. 4

「広野廃寺」 宇治市教育委員会 1990. 6.23

- 「浄妙寺跡」 同上 1990. 8.11
 「蟹満寺」 山城町教育委員会 1990. 6.24
 「黒田古墳」 園部町教育委員会 1990. 6.16
 「霧ヶ鼻古墳群第2次」 宮津市教育委員会 1990. 7.28
 「行永遺跡」 舞鶴市教育委員会 1990. 6. 3
 「史跡蛭子山古墳―第4次発掘調査―」 加悦町教育委員会 1990.10.20
 「離山古墳」 網野町教育委員会 1990. 9. 1
 「離湖古墳」 同上 1990.10. 3
 「陵神社12号墳」 久美浜町教育委員会 1990. 8.25
 「植物園北遺跡」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1990. 7.15
 「下西代古墳群」 同上 1990. 9.15
 「長岡京跡左京七条二坊」 同上 1990. 9.29
 「長岡京跡左京第244次調査(高田遺跡)」 (財)向日市埋蔵文化財センター 1990. 8. 1
 「長岡京跡左京第248次調査」 同上 1990. 9. 1
 「長岡京跡右京第339次調査」 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1990. 3.25
 「平安京右京五条二坊九町・十六町」 京都府京都文化博物館 1990. 7.22
 「鴨谷東古墳群」 立命館大学文学部 1990. 9. 5

その他の雑誌・報告・論文等

- 『京都府埋蔵文化財情報』第34号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989.12
 『京都府埋蔵文化財情報』第35号 同上 1990. 3
 『京都府埋蔵文化財情報』第36号 同上 1990. 6
 『京都府埋蔵文化財情報』第37号 同上 1990. 9
 『京都府遺跡調査概報』第35冊 同上 1989.11
 『京都府遺跡調査概報』第36冊 同上 1989.12
 『京都府遺跡調査概報』第37冊 同上 1990. 3
 『京都府遺跡調査概報』第38冊 同上 1990. 3
 『京都府遺跡調査概報』第39冊 同上 1990. 3
 『京都府遺跡調査報告書』第13冊 同上 1990. 3
 『京都・古代との出会い―京都府埋蔵文化財調査研究センター10周年記念特別展図録―』
 同上 1990. 8
 『京都府指定・登録文化財等目録』 京都府教育委員会 1989.12

- 『京都の文化財』第8集 同上 1990. 3
- 『京都市の文化財—京都市指定・登録文化財』第7集 京都市文化観光局 1990. 2
- 『京都市文化財ボックス』第5集 同上 1990. 3
- 『京都市文化財だより』第13～14号 同上 1990. 6～10
- 『宇治の文化財—宇治市指定文化財—』 宇治市教育委員会 1990. 3
- 『八幡市遺跡地図』 八幡市教育委員会 1990. 3
- 『城陽の文化財案内—遺跡・遺物を中心に—』 城陽市教育委員会 1990. 3
- 『山城町史 史料編』 山城町教育委員会 1990. 3
- 『加茂町史編さんだより紫陽花』第8～10号 加茂町 1990. 2～10
- 『笠置町と笠置山—その歴史と文化—』 笠置町教育委員会 1990. 3
- 『三和町史—町史編さん事業の経過と成果—』 三和町 1990.10
- 『舞鶴市内神社一覧表』 舞鶴市教育委員会 1989.11
- 『弥栄町の文化財』 弥栄町教育委員会 1989.12
- 『京都文化博物館紀要 朱雀』第3集 京都府京都文化博物館 1990. 3
- 『昭和63年度 財団法人向日市埋蔵文化財センター年報Ⅰ』 (財)向日市埋蔵文化財センター 1989.11
- 『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和63年度』 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1990. 3
- 『京都の文化財—その歴史と保存—』 (財)京都府文化財保護基金 1990.10
- 『文化財報』第67～70号 同上 1989.11～1990. 8
- 『会報』第68～69号 (財)京都古文化保存協会 1990. 1～10
- 『仏画に美を求めて—石川晴彦没後十年—特別陳列図録26』 京都府立丹後郷土資料館 1990.4
- 『海・ふね・人 特別陳列図録27』 同上 1990. 7
- 『丹後郷土資料館友の会ニュース』No.34 同上 1990. 7
- 『山城郷土資料館報』第8号 京都府立山城郷土資料館 1990. 3
- 『特別展示図録10 木津川の歴史と民俗』 同上 1990.10
- 『企画展資料11 惣村から近世の農村へ—綴喜郡東村の歴史—』 同上 1990. 4
- 『企画展資料12 発掘成果速報—平成元年度の調査から—』 同上 1990. 8
- 『山城郷土資料館友の会ニュース』第10号 同上 1990. 1
- 『山城郷土資料館だより』第12号 同上 1990. 3
- 『京都府資料目録追録』No.6 京都府立総合資料館 1990. 3
- 『資料館紀要』第18号 同上 1990. 3

- 『総合資料館だより』No.82～85 同上 1990. 1～10
- 『昭和63年度 京都国立博物館年報』 京都国立博物館 1990. 3
- 『桃山時代の京都 特別展図録』 京都市考古資料館 1989.11
- 『企画展図録 京都市の文化財新指定の美術工芸品』 京都市歴史資料館 1990. 6
- 『特別展図録 平安京以前の京都』 同上 1990.10
- 『泉屋博古館紀要』第六巻 (財)泉屋博古館 1990. 1
- 『鏡鑑』 同上 1990. 3
- 『向日市文化資料館研究紀要』第4号 向日市文化資料館 1990. 3
- 『向日市文化資料館館報』第5号 同上 1990. 3
- 『第6回特別展図録 木に記された歴史—中・近世遺跡出土の木簡や社寺伝来の木札を中心に—』 同上 1990.10
- 『昭和63年度 宇治市歴史資料館年報』 宇治市歴史資料館 1990. 3
- 『宇治の文化財—市指定を中心に—』 同上 1990. 7
- 『第9回企画展図録 武者行列—甲冑の世界—』 亀岡市文化資料館 1990. 4
- 『第10回企画展図録 丹波の埴輪—1500年の時を越えて—』 同上 1990. 9
- 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター 1990.3
- 『史想』第22号 京都教育大学考古学研究会 1989.11
- 『大谷大学史学論究』第3号 大谷大学 1989.12
- 『京都橘女子大学研究紀要』第16号 京都橘女子大学 1989.12
- 『古代文化』第370～381号 (財)古代学協会 1989.11～1990.10
- 『土車』第53～55号 同上 1990. 1～7
- 『京都考古』第53～57号 京都考古刊行会 1990. 1～8
- 『志くれてい』第31～34号 (財)冷泉家時雨亭文庫 1989.12～1990. 9
- 『文愛』第3号 (財)宇治市文化財愛護協会 1990. 7
- 『波布理曾能』第7号 精華町の自然と歴史を学ぶ会 1990. 4
- 『精華町文化財愛護会だより』第7号 精華町文化財愛護会 1990. 4
- 『丹波史談』131号 口丹波史談会 1990. 3
- 『綾部史談 創立40周年記念特集号』 綾部史談会 1990. 1
- 『私市円山古墳』 同上 1990. 3
- 『古人骨は語る—骨考古学ことはじめ—』 (株)同朋舎出版 1990. 5

受贈図書一覧(2.8.1~2.10.31)

(財)北海道埋蔵文化財センター	財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第61~67集, 調査年報 2 平成元年度, 北海道の遺跡—財団法人北海道埋蔵文化財センター設立10周年記念—
釧路市埋蔵文化財調査センター	釧路市幣舞遺跡調査報告書, 釧路市材木町 5 遺跡調査報告書 II
苫小牧市埋蔵文化財センター	とまこまい埋文だより No. 20, 苫小牧東部工業地帯の遺跡群 III
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて No. 49
(財)福島県文化センター	福島県文化財調査報告書 第201~204・206~208・210~216集
(財)いわき市教育文化事業団	よみがえるいわきの歴史, いわき市教育文化事業団研究紀要 第1号, いわき市埋蔵文化財調査報告 第15・27冊
(財)茨城県教育財団	茨城県教育財団文化財調査報告書 第53~60集, 年報 9 平成元年度
埼玉県立埋蔵文化財センター	埋文さいたま 第1号
(財)千葉県文化財センター	研究連絡誌 第26~28号, 千葉県文化財センター年報 No. 15, 千葉県文化財センター調査報告 第170~187集
(財)市原市文化財センター	(財)市原市文化財センター調査報告書 第38集, 青柳塚群, 御蔭目浅間神社古墳
(財)長生郡市文化財センター	郷土の文化財 9・10, (財)長生郡市文化財センター調査報告書 第6~7集, (財)長生郡市文化財センター年報 No. 4
(財)山武郡市文化財センター	(財)山武郡市文化財センター年報 No. 5
横浜市埋蔵文化財センター	港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 X~XI
(財)富山県文化振興財団	埋蔵文化財年報 1 平成元年度, 東海北陸自動車道関連発掘調査概報 1
富山県埋蔵文化財センター	富山県埋蔵文化財センター年報 平成元年度, 北陸自動車道遺跡調査報告, 富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査概要 I
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報 3, 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター年報 3~4
山梨県埋蔵文化財センター	年報 6 平成元年度
長野市埋蔵文化財センター	長野市埋蔵文化財センター所報 No. 1, 長野市の埋蔵文化財 第35~36集
(財)愛知県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財愛知 No. 22
三重県埋蔵文化財センター	三重県埋文センター通信 No. 1~2
(財)滋賀県文化財保護協会	20年のねんりん
滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第124~127号
(財)大阪府埋蔵文化財協会	(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第14~23・26~38・42~44・51・57輯

(財)大阪文化財センター	第8回 近畿地方埋蔵文化財研究会資料, 大阪文化財センター考古学ボックス 考古学者の考古学
(財)大阪市文化財協会	葦火 27~28号
(財)東大阪市文化財協会	東大阪市文化財協会ニュース Vol.4 No.4, 若江遺跡第32・33次発掘調査報告, 西ノ辻遺跡第21次発掘調査報告, 鬼虎川遺跡第1~3次発掘調査報告, (財)東大阪市文化財協会概報集 1989年度
(財)枚方市文化財研究調査会	ひらかた文化財だより 第5号
高槻市立埋蔵文化財調査センター	高槻市文化財年報 昭和61・62年度, 高槻市文化財調査概要 X IV
奈良国立文化財研究所	1989年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報, 奈良国立文化財研究所学報 第46冊
奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部	飛鳥・藤原宮発掘調査概報 20
(財)元興寺文化財研究所	(財)元興寺文化財研究所通信 No. 34~35
(財)広島県埋蔵文化財センター	ひろしまの遺跡 第42号
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒 No. 204~207, 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1988
福岡市埋蔵文化財センター	福岡市埋蔵文化財センター年報 第9号
(財)北九州市教育文化事業団文化財調査室	埋蔵文化財調査室年報 6 昭和63年度, 研究紀要 第4号, 北九州市埋蔵文化財調査報告書 第79・89~94・96集
平賀町教育委員会	平賀町埋蔵文化財報告書 第19集
山形県教育委員会	山形県埋蔵文化財調査報告書 第104・117・122・123・128・134~147集
郡山市教育委員会	郡山市文化財研究紀要 第5号, 岩ヶ崎A遺跡, 郡山東部 10, 安子島土地改良関連発掘調査報告書 2, 郡山館遺跡 III, 清水台遺跡
いわき市教育委員会	夏井庵寺跡 III
群馬町教育委員会	群馬町埋蔵文化財調査報告 第27~29集
入間市教育委員会	埼玉県入間市埋蔵文化財調査報告 第10集
魚津市教育委員会	魚津市立博物館紀要 第1・2号
小矢部市教育委員会	小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第27・28・30冊
福野町教育委員会	富山県福野町安居五百歩遺跡 I
富来町教育委員会	石川県羽咋郡富来町田中遺跡
敦賀市教育委員会	敦賀市埋蔵文化財調査概報 2
今立町教育委員会	今立町埋蔵文化財調査報告 第3集
松本市教育委員会	松本市文化財調査報告 No. 82
長久手町教育委員会	長久手町史 史料編4 (民俗・言語)

八日市市教育委員会	雪野山古墳発掘調査1周年記念「雪野山古墳をめぐるシンポジウム」
蒲生町教育委員会	蒲生町文化財資料集 8～11
高島町教育委員会	高島町歴史民俗叢書 第6輯
中主町教育委員会	中主町文化財調査報告書 第24・25冊
能登川町教育委員会	能登川町埋蔵文化財調査報告書 第14～18集
大阪市教育委員会	昭和63年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
大阪狭山市教育委員会	大阪狭山市文化財報告書 3
大阪狭山市教育委員会狭山池調査事務所	狭山池調査事務所 平成元年度調査報告書
富田林市教育委員会	富田林市埋蔵文化財調査報告 16
美原町教育委員会	梵鐘の音は時を超えて
太子町教育委員会	播磨国鶴荘現況調査報告 III
八鹿町教育委員会	兵庫県八鹿町ふるさとシリーズ 第3集
竹野町教育委員会	竹野町文化財調査報告書 第7集
広陵町教育委員会	広陵町埋蔵文化財調査概報 1～3
和歌山市教育委員会	山口遺跡第5次発掘調査報告書, 鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書
倉吉市教育委員会	倉吉市文化財調査報告書 第60集
御津町教育委員会	御津町埋蔵文化財発掘調査報告 3・4・6
広島県教育委員会	広島県埋蔵文化財保護行政資料 1, 明官地廃寺跡—第4次発掘調査概報—, 備後国府跡—推定地にかかるとする第8次調査概報—
東城町教育委員会	広島県比婆郡東城町大迫山第1号墳発掘調査概報
佐賀県教育委員会	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 第12集, 佐賀県文化財調査報告書 第96・97集, 特別史跡名護屋城跡並びに陣跡5—加藤嘉明陣跡発掘調査概報—
野尻町教育委員会	野尻町文化財調査報告書 第4集
釧路市立博物館	釧路市立博物館々報 No.317～324
北上市立博物館	博物館だより No.12
秋田県立博物館	博物館ニュース No.81・82, 秋田県立博物館研究報告 第15号
栃木県立博物館	第33回企画展図録 中世への旅～聖と俗のあいだで～
群馬県立歴史博物館	群馬県立歴史博物館紀要 第3・10号
埼玉県立さきたま資料館	さきたま No.2
国立歴史民俗博物館	歴博 第42・43号
千葉県立中央博物館	千葉県立中央博物館研究報告—人文科学— 第1・2号
千葉県立房総風土記の丘	千葉県立房総風土記の丘年報 13
市立市川考古博物館	考古・歴史博物館ニュースほりのうち No.13, 市川遺跡ガイドブック・1(柏井編), 昭和63年度 市立市川考古博物館年報

流山市立博物館	流山市立博物館年報 No.12
芝山町立芝山古墳・はにわ館	かんぼう武射 No.1(創刊号)
成田山霊光館	なりた No.48
調布市郷土博物館	調布市郷土博物館だより No.35
大田区立郷土博物館	私たちのモース～日本を愛した大森貝塚の父～, 旅情詩人大正・昭和の風景版画家 川瀬巴水
中野区立歴史民俗資料館	中野区立歴史民俗資料館だより 第2号
出光美術館	出光美術館館報 第71号
横浜市三殿台考古館	横浜市三殿台考古館館報 No.15
茅ヶ崎市文化資料館	資料館だより No.71・72
石川県立歴史博物館	石川れきはく 第16・17号, 石川県立歴史博物館紀要 第3号, 展示案内, 魅惑の日本海文化
小松市立博物館	小松市立博物館だより 第47号
福井県立朝倉氏遺跡資料館	朝倉氏遺跡資料館紀要 1989, 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 平成元年度発掘調査環境整備事業概要 21
敦賀市立歴史民俗資料館	紀要 第5号
三方町立郷土資料館	古代のロマン 三方のあけぼの展—平成元・2年度の発掘調査から—
山梨県立考古博物館	山梨県立考古博物館だより No.21
茅野市八ヶ岳総合博物館・茅野市美術館・茅野市尖石考古館	茅野市の博物館だより八ヶ岳通信 No. 3
浜松市博物館	浜松市博物館だより No.31
沼津市歴史民俗資料館	資料館だより 93
名古屋市博物館	研究紀要 第13巻
斎宮歴史博物館	斎宮歴史博物館だより No.5, 史跡斎宮跡 平成元年度発掘調査概報, 企画展 古代の祈り—祓いの顔—
大津市歴史博物館	博物館だより No.3
高島町歴史民俗資料館	高島の民俗 第71号
彦根城博物館	彦根城博物館だより 10
堺市博物館	堺市博物館優品図録
八尾市立歴史民俗資料館	銅鐸と古代のまつり
兵庫県立歴史博物館	わたりやぐら 第16号, 歴博ニュース No.31・32, 特別展 願いかないたまえ—古代人の呪術と信仰—
西宮市立郷土資料館	西宮市立郷土資料館ニュース 第7号, 西宮市立郷土資料館報 平成元年度, 西宮市立郷土資料館第5回特別展「西宮の絵馬」展示案内図録
島根県立八雲立つ風土記の丘 出雲玉作資料館	八雲立つ風土記の丘 No.102・103, 古代の出雲と吉備・大和玉作資料館ニュース 第15号

広島県立歴史博物館 (財)日本はきもの博物館 九州歴史資料館	広島県立歴史博物館ニュース 第4号 日本はきもの博物館だより 39・40 古代の福岡, 九州歴史資料館年報 平成元年度, 九州歴史資料館 研究論集 15
佐賀県立九州陶磁文化館 長崎県立美術博物館 鹿児島県歴史資料センター黎明館	佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要 第2号 長崎県立美術博物館だより No.108・109 館企画特別展展示図録 仏教文化の伝来—薩摩国分寺への道—
東北学院大学東北文化研究所 筑波大学歴史・人類学系 早稲田大学校地埋蔵文化財調査室 早稲田大学考古学会 日本大学史学会 東海大学校地内遺跡調査委員会 大阪大学文学部考古学研究室	東北学院大学東北文化研究所紀要 第22号 筑波大学先史学・考古学研究 第1号 早大埋蔵文化財調査室月報 No.60~62・66 古代 第90号 史叢 第45号 真田大原遺跡 大阪大学文学部考古学研究室研究報告 第1冊, 長法寺南原古墳 Ⅳ, 雪野山古墳—第1次発掘調査概報—, 日本古代葬制の考古学 研究—とくに埋葬姿勢と葬送儀礼との関わり— 山陰地域研究 第6号 広島大学総合移転地埋蔵文化財発掘調査年報 Ⅷ 研究室活動報告 24
島根大学附属図書館 広島大学 熊本大学文学部考古学研究室	日本の美術 第292号 歴史手帖 第203・204号 葛飾区遺跡調査会調査報告書 第3・8集 川崎市麻生区谷ツ遺跡—黒川地区遺跡群報告書 II— 横浜市港北区諏訪下北遺跡発掘調査報告書 神奈川県大和市下鶴間甲一号遺跡第3次調査 帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第2集, 帝京大学山梨文化 財研究所報 第10号, 湯之奥金山遺跡第1次調査概報 土車 第54・55号, 古代文化 第380~382号 浜田耕作著作集 第3巻 平成元年度 羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財調査概要 神戸市西区神出町神出 III 文明のクロスロード Museum Kyushu 第33号
至文堂 (株)名著出版 葛飾区遺跡調査会 黒川地区遺跡調査団 玉川文化財研究所 下鶴間甲一号遺跡調査団 (財)山梨文化財研究所 (財)古代学協会 浜田耕作先生著作集刊行委員会 駒ヶ谷遺跡調査会 妙見山麓遺跡調査会 博物館等建設推進九州会議 京都府教育委員会	国宝平等院鳳凰堂修理工事報告書, 第37回 日本伝統工芸展示図録

丹後町教育委員会	京都府丹後町文化財調査報告 第6集
舞鶴市教育委員会	舞鶴市内神社一覧表
三和町	三和町史—町史編さん事業の経過と成果—
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告 第23・26冊
宇治市教育委員会	宇治文化財—宇治市指定文化財—
山城町教育委員会	山城町史 史料編
加茂町	加茂町史編さんだより紫陽花 第10号
(財)京都文化財団	京都文化博物館紀要朱雀 第3集, 京都文化博物館調査研究報告 第5集
京都府立山城郷土資料館	山城郷土資料館だより 第13号, 山城郷土資料館報 第8号, 特別展示図録10 木津川の歴史と民俗, 企画展資料 11・12
京都府立総合資料館	総合資料館だより No.85
京都市文化観光局文化部文化財保護課	京都市文化財だより 第14号
(財)京都府文化財保護基金	文化財報 No.70
(財)京都古文化保存協会	会報第69号
亀岡市文化資料館	第10回企画展展示図録 丹波の埴輪—1500年の時を超えて—
京都市考古資料館	第40回 京都市考古資料館文化財講座資料
向日市文化資料館	第6回特別展図録 木に記された歴史—中・近世遺跡出土の木簡や社寺伝来の木札を中心に—
(財)泉屋博古館	鏡鑑
同志社大学文学部文化学科	同志社大学文学部考古学調査報告 第6・7冊
福知山史談会	史談ふくち山 第454~457号
綾部の文化財を守る会	綾部の文化財 第30・31号
京都考古刊行会	京都考古 第57号
石部正志	峰考古 第7・8号
畑美樹徳	延勝寺跡の発掘調査, 大藪遺跡発掘調査報告, 尊勝寺跡発掘調査概報, 御堂ヶ池群集墳20号墳発掘調査報告, 延勝寺跡, 大將軍社跡発掘調査報告, 北白川廃寺跡発掘調査報告, 法勝寺跡, 六勝寺跡, 上久世遺跡発掘調査報告, 北野廃寺跡発掘調査報告, 飯岡車塚古墳発掘調査報告, 洛南高等学校新築体育館用地埋蔵文化財調査報告
樋口隆康	大陸からみた古代日本
福田惇	橿原考古学研究所附属博物館特別展図録 「はにわの動物園」—関東の動物埴輪—

—編集後記—

今年も12月になり、何かと気ぜわしくなりましたが、情報38号が完成しましたのでお届けします。

今号では、投稿原稿2本と、当調査研究センター調査の瓦谷古墳の概要を中心に掲載しました。このうち、大田南2号墳では舶載鏡が出土しており、近年注目されている古墳です。また、「聖域区画小考」は、職員の研究論考で、古墳上での儀礼について考えたものになっています。

今号では、資料紹介として長岡京跡左京第216次調査で出土した古墳時代遺物のことも掲載することができました。よろしく御味読下さい。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第38号

平成2年12月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)